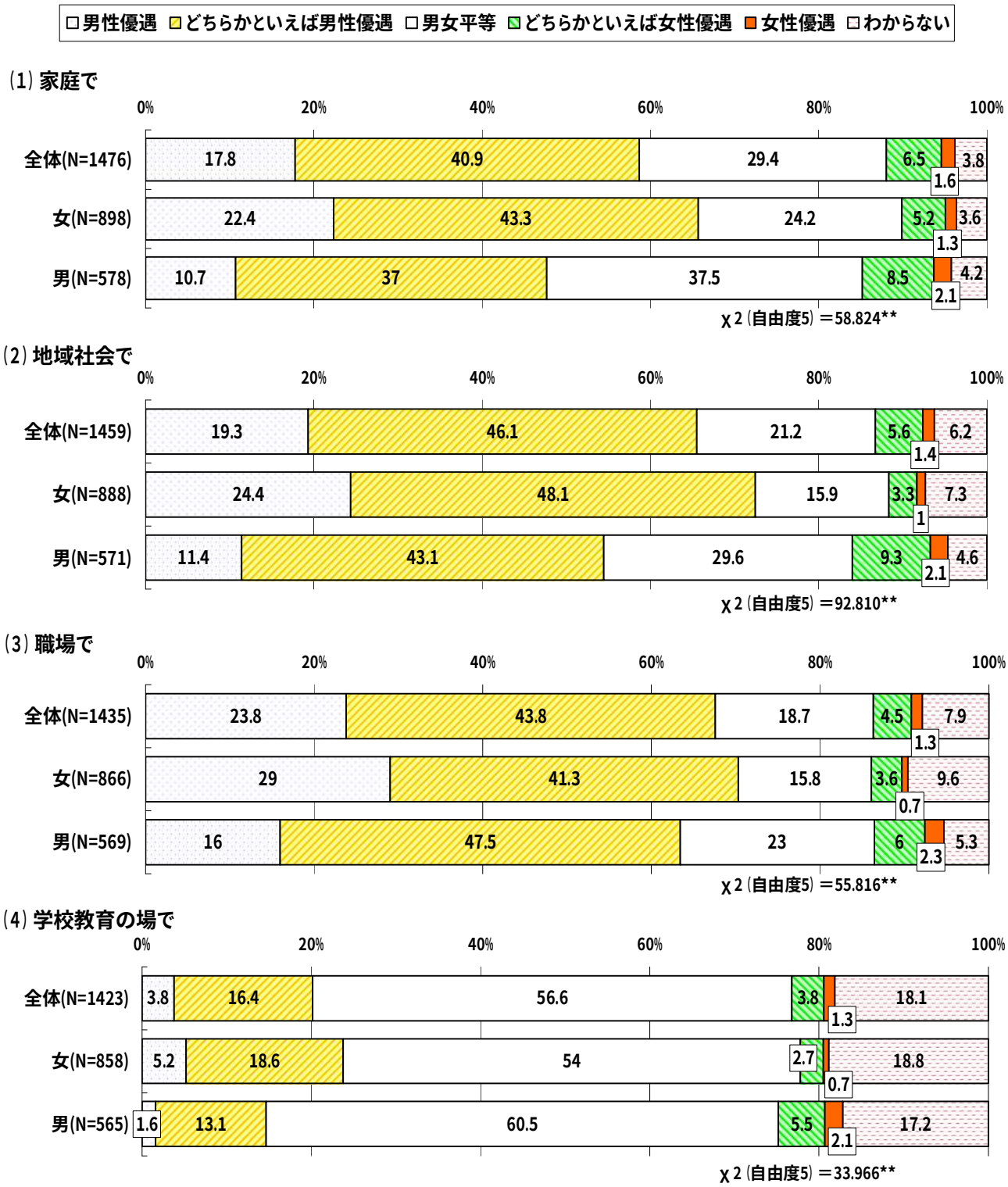
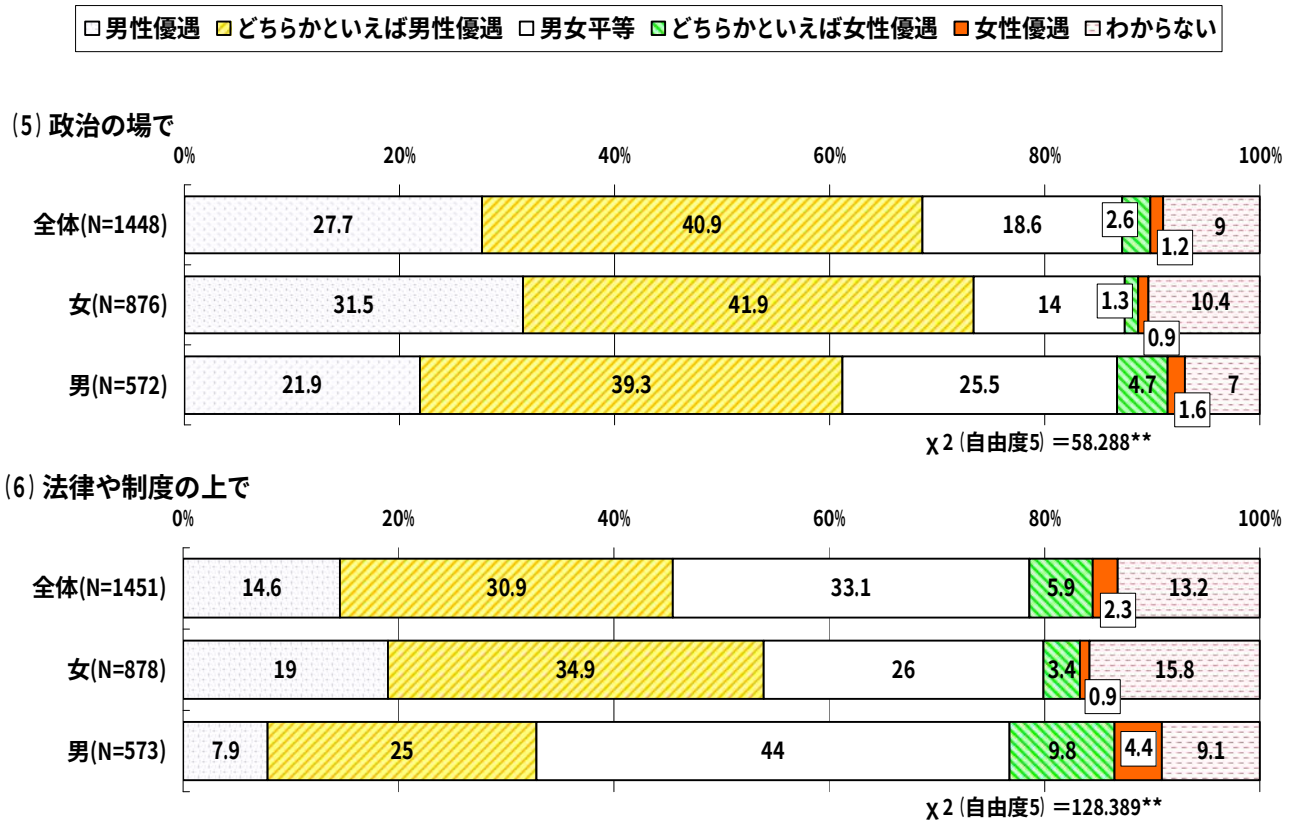
１．男女の地位の平等について

問１　次にあげる(１)から(６)の分野で、男女の地位を比べてみて、あなたはどのように思いますか。それぞれについて、あてはまる番号を<u>１つだけ</u>選んで数字に◯をつけてください。

【全体･性別】

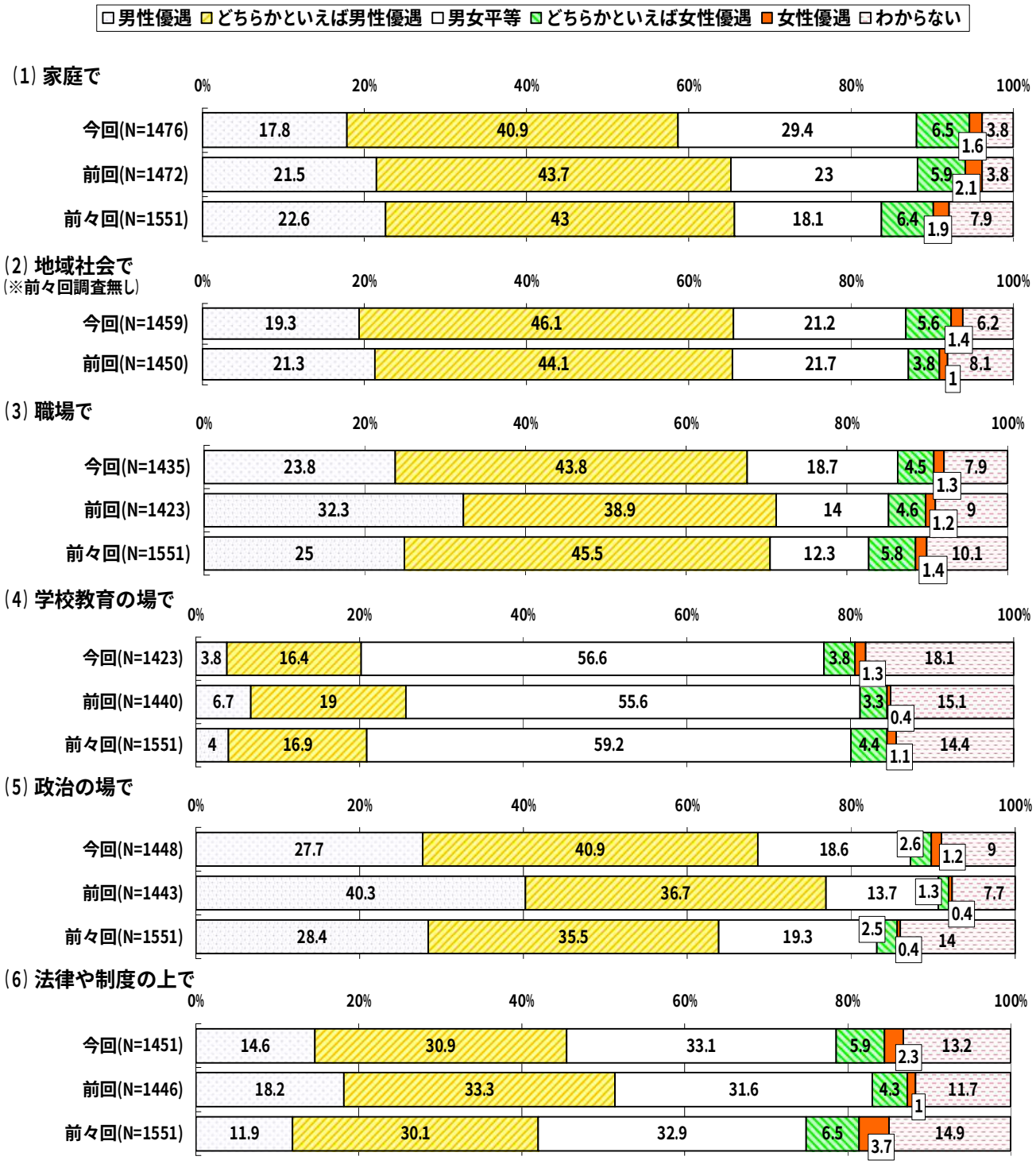




日常生活の各分野において、男女の地位が平等になっているかという問いに対して、(4)「学校教育の場で」の1分野のみ、男女平等と考える人が多く、56.6%となっている。その他の分野では、「男性が優遇されている」「どちらかといえば男性が優遇されている」と考える『男性優遇派』の割合が高くなっている。

性別でみると、すべての分野において、女性は男性に比べて『男性優遇派』が多く、特に(6)「法律や制度の上で」の平等について、男女の意識の違いが顕著である。

【前回･前々回調査との比較】



平成12年に岡山市で実施された「男女共同参画に関する市民意識・実態調査」（以下「前回調査」）と比較すると、『男女平等派』の割合が目立って増加したのは、(1)「家庭で」（23.0→29.4%）、(3)「職場で」（14.0→18.7%）、(5)「政治の場で」（13.7→18.6%）の3分野である。(1)「家庭で」については男性の増加が、(3)「職場で」については女性の増加が顕著になっている。

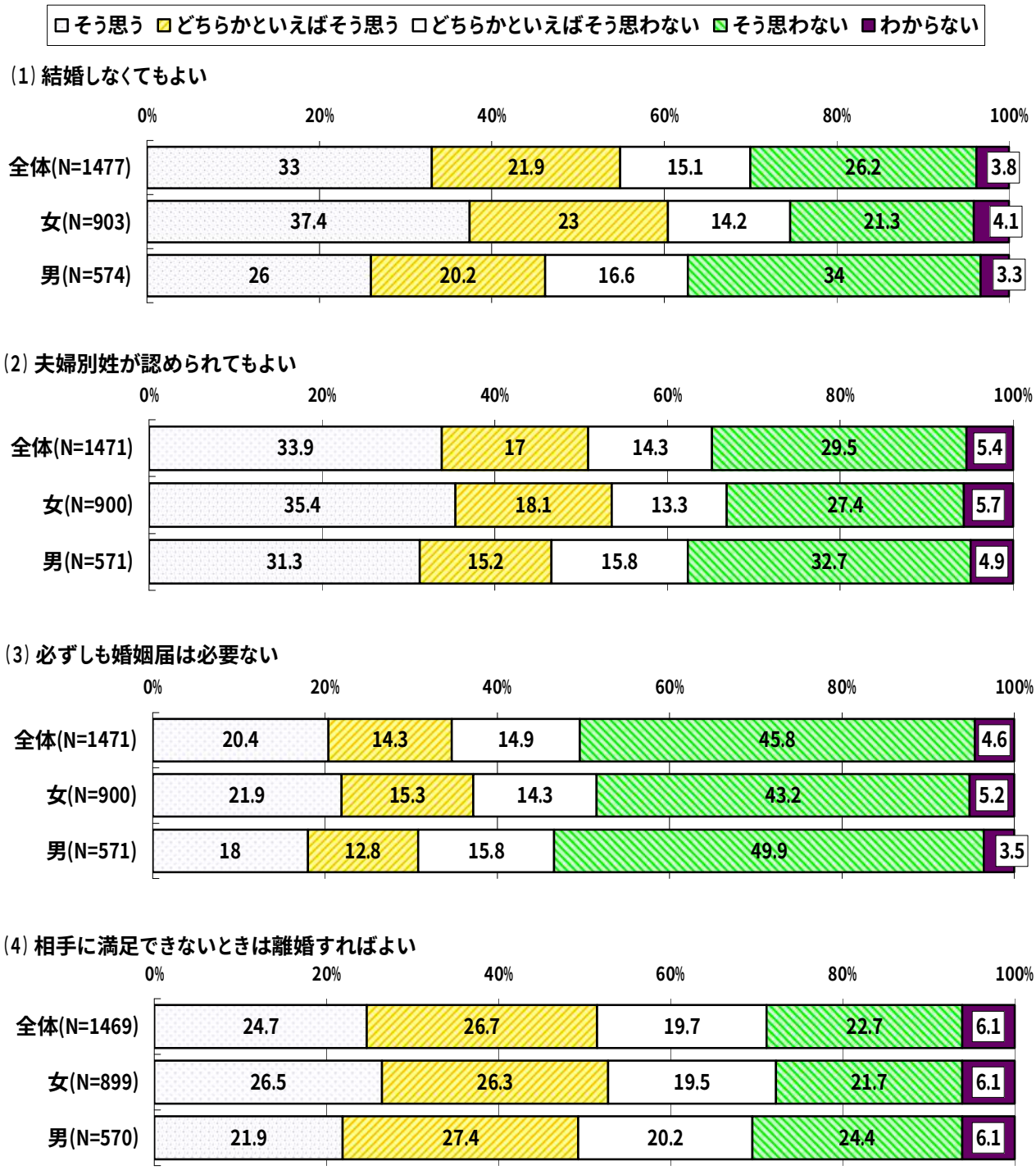
前回調査では、その前の調査（［平成6年岡山市調査］）に比べて (5)「政治の場で」の『男女平等派』の割合が減ったが、今回調査では再び増加している。今回の増加については、調査時期が衆議院選挙の直後であり、女性立候補者が多かったことも影響していると思われる。

２．結婚・家庭生活について

問２　結婚や家庭生活について、(１)から(８)のような考え方があります。これについて、あなたはどのように思いますか。それぞれについて、あてはまる番号を<u>１つだけ</u>選んで数字に○をつけてください。

ア　結婚について

【全体･性別】



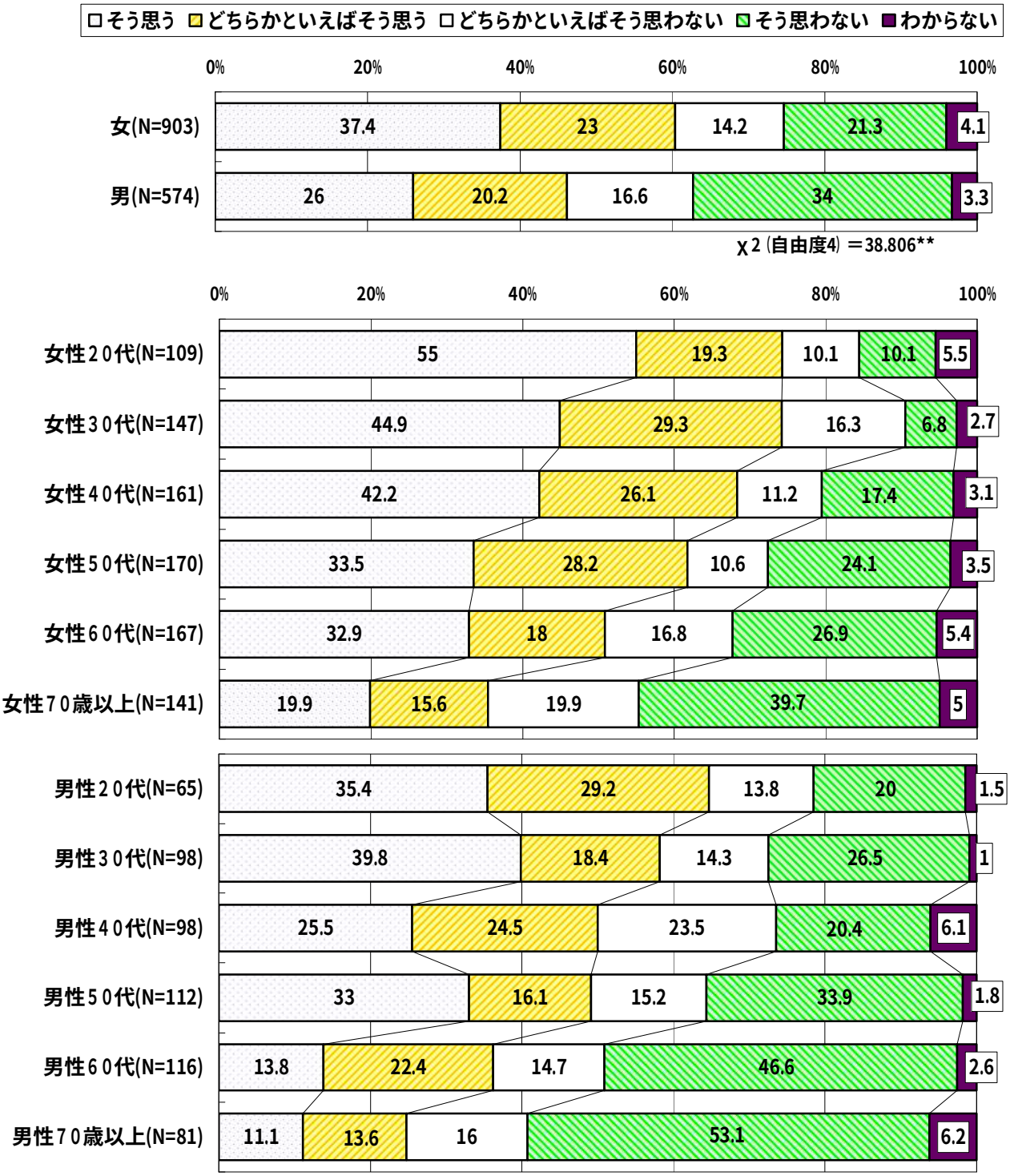
ここでは、(1)で未婚・非婚、(2)で夫婦別姓、(3)で事実婚・同棲、(4)で離婚に対する考え方を尋ねている。

「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を『肯定派』、「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」を『否定派』と定義すると、『肯定派』が『否定派』を上回るのは、(1)「必ずしも結婚しなくてよい」（肯定派54.9%＞否定派41.3%）、(2)「夫婦別姓の結婚が認められてもよい」（肯定派50.9%＞否定派43.8%）、(4)「結婚しても相手に満足できないときは、離婚すればよい」（肯定派51.4%＞否定派42.4%）の3項目であり、いずれも肯定派が5割を超えている。

他方、『否定派』が『肯定派』を上回るのは、(3)「お互いが合意すれば、必ずしも婚姻届を出す必要はない」（肯定派34.7%＜否定派60.7%）の1項目である。法律で認められた婚姻という制度的形式に対する支持は、依然として根強いといえる。

また、性別でみると、いずれの項目も女性は男性に比べて『肯定派』の割合が高くなっているのが特徴である。

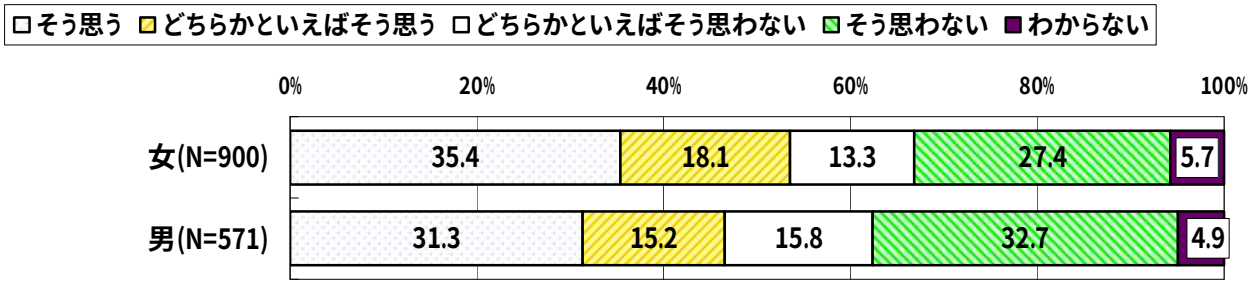
(1) 必ずしも結婚しなくてよい

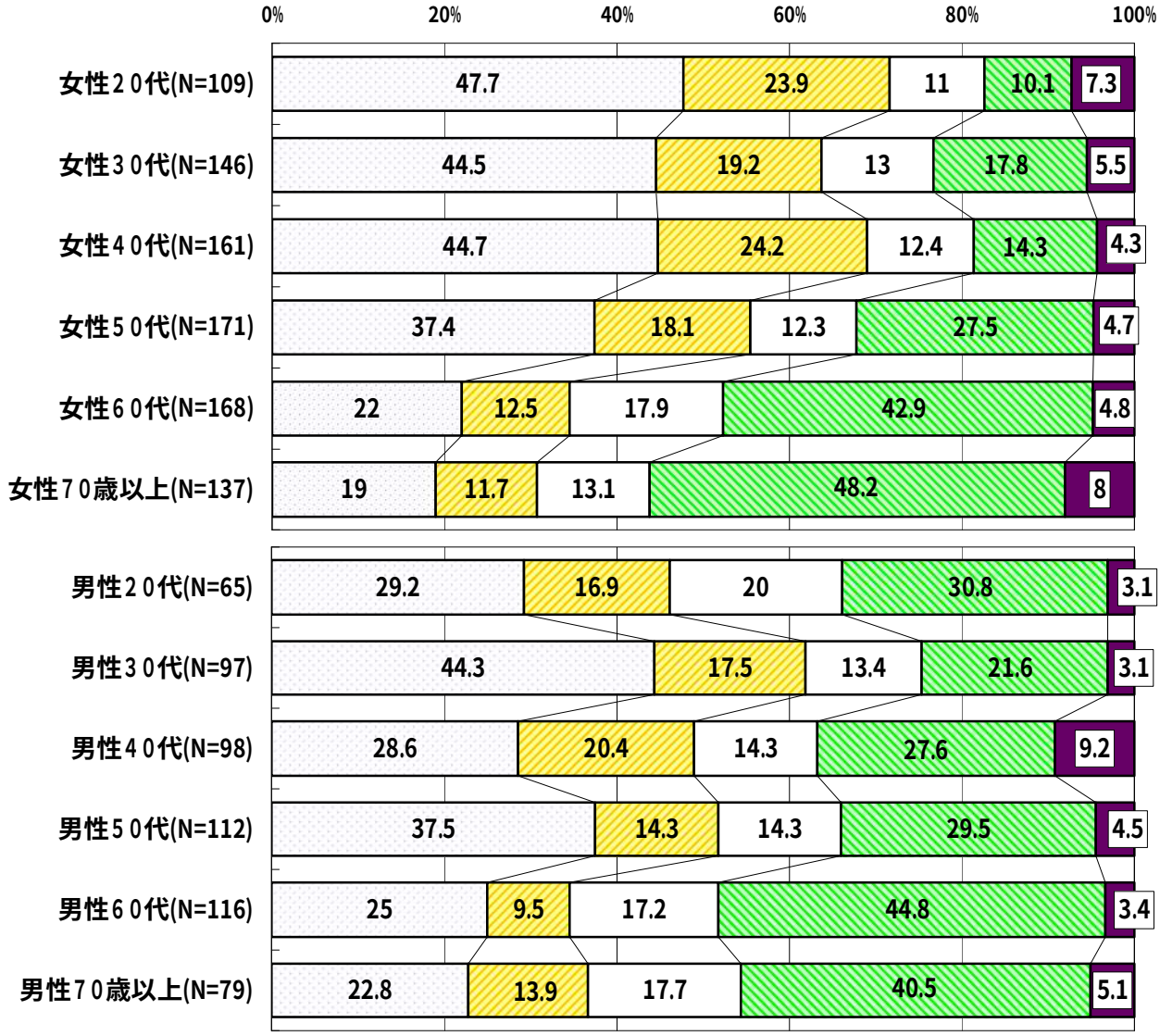


男女ともに年代を追うごとに『肯定派』が減少しており、とくに60歳代以上とそれ以下の年代の間に意見の食い違いがみられる。

20歳代・30歳代の女性では『肯定派』が7割を超えていることは注目される。

(2) 夫婦別姓の結婚が認められてもよい

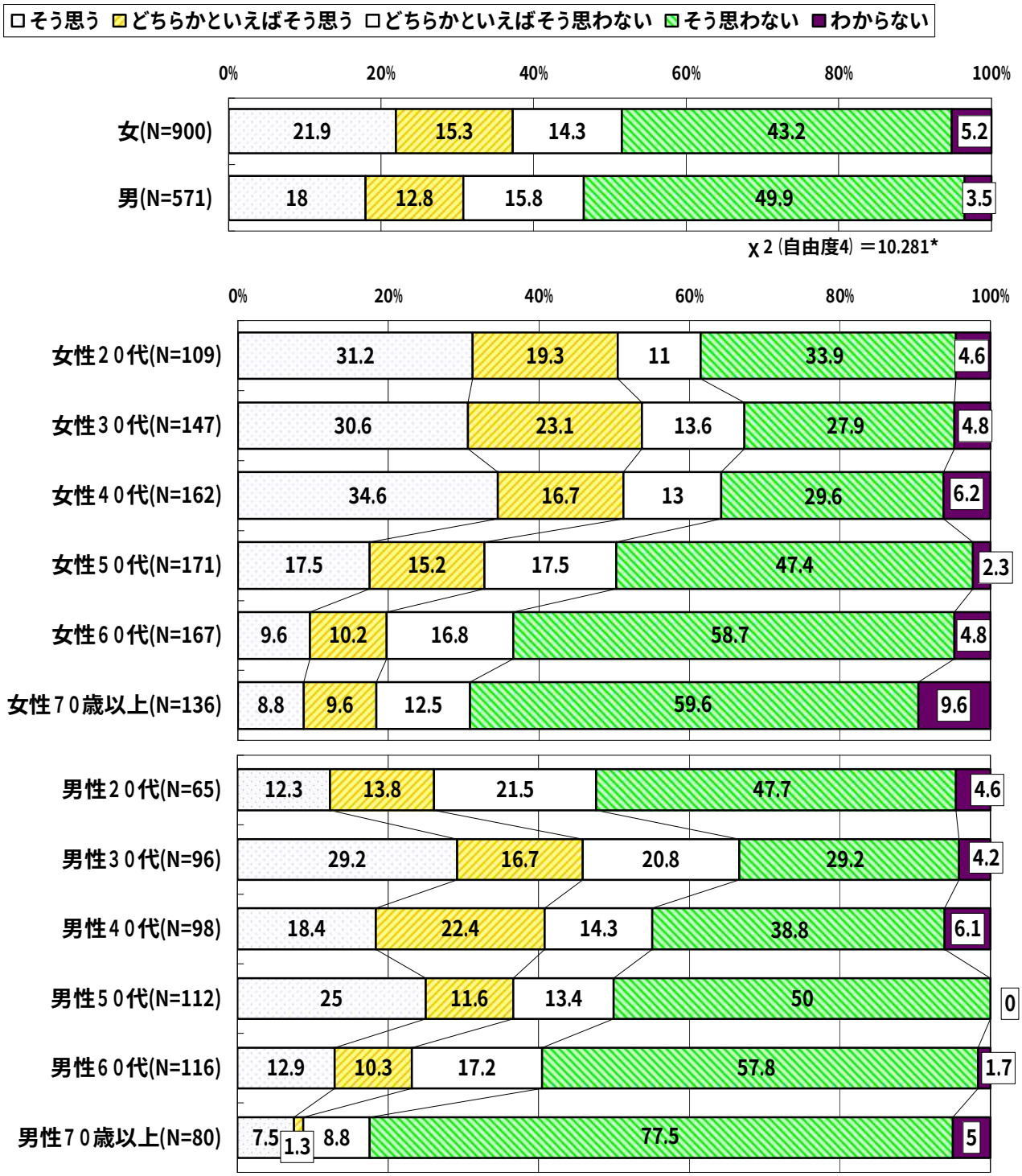




選択的夫婦別氏制度等に関する法務省法制審議会総会による答申「民法の一部を改正する法律案要綱」が平成8年2月に出されて以来10年が経とうとしているが、この項目でも50歳代以下と60歳代以上の年代の間で意見が分かれていることがわかる。

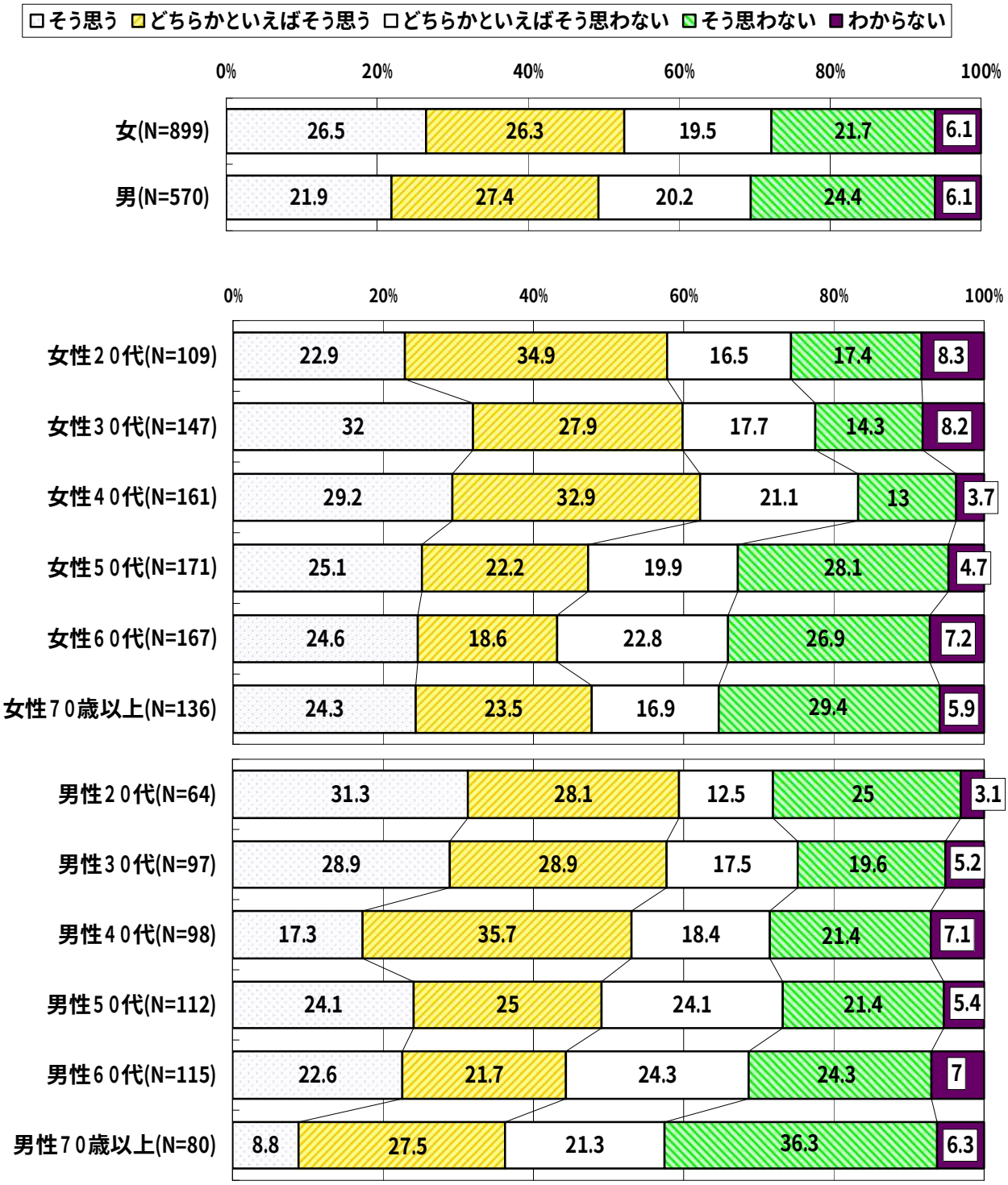
特に20歳代女性の7割が『肯定派』であるのに対し、60歳代以上の女性の『肯定派』は3割にとどまるなど、女性の間で年代による意識の違いが顕著である。

(3) お互いが合意すれば、必ずしも婚姻届を出す必要はない



全体でみると6割が『否定派』であるが、性別・年代別にみると、40歳代以下の女性において『肯定派』が『否定派』を上回っている。20歳代の男女に注目すると、男性の26.1%が『肯定派』であるのに対し、女性は50.5%が『肯定派』と男女間の意識の違いが大きいことがわかる。

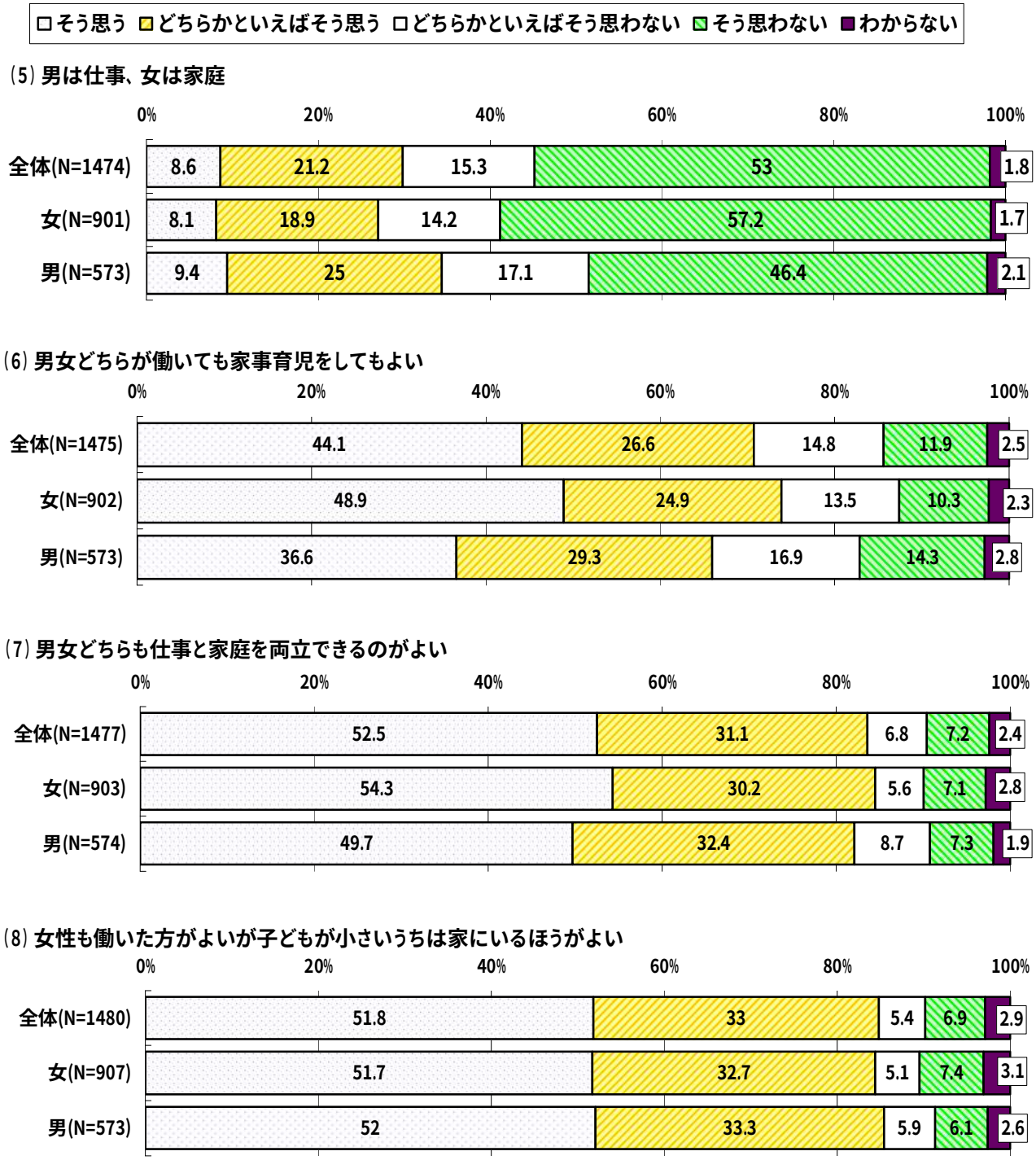
(4) 結婚しても相手に満足できないときは、離婚すればよい



性別・年代別による違いが比較的小さい項目ではあるが、女性全体をみると『肯定派』は52.8%で、これを下回るのは50歳代以上であり、50歳を境として意識が分かれる結果となっている。男性については、年代が上がるとともに『肯定派』の割合が減っていく。

イ　家庭生活について

【全体・性別】



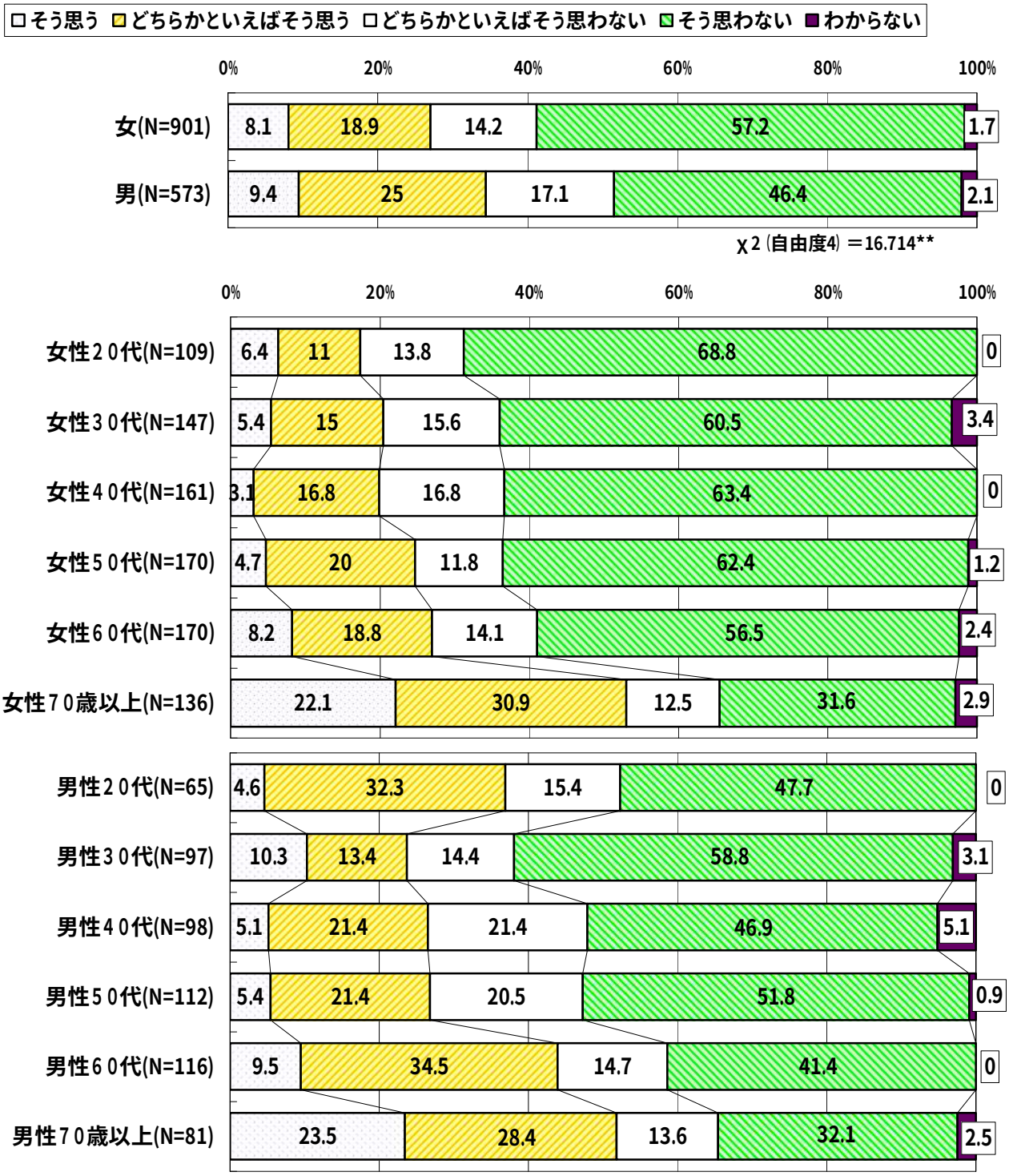
家庭生活については、(5)から(7) までで男女の性別役割分担に関する3つの類型、(8) で女性の育児退職・休職について尋ねている。

「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を『肯定派』、「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」を『否定派』と定義すると、『肯定派』が『否定派』を上回るのは、(6)「男と女の、どちらが外で働いても、どちらが家事・育児・介護をしてもよい」(肯定派70.7%＞否定派26.7%)、

(7)「男も女も、どちらも仕事と家庭を両立できるのがよい」（肯定派83.6%＞否定派14.0%）、(8)「女も外で働いたほうがよいが、子どもが小さいときは女が家にいるほうがよい」（肯定派84.8%＞否定派12.3%）の3項目である。いずれも『肯定派』が圧倒的に多い。『否定派』が『肯定派』を上回るのは(5)「男は外で働くもの、女は家庭を守るものだ」（肯定派29.8%＜否定派68.3%）の1項目である。

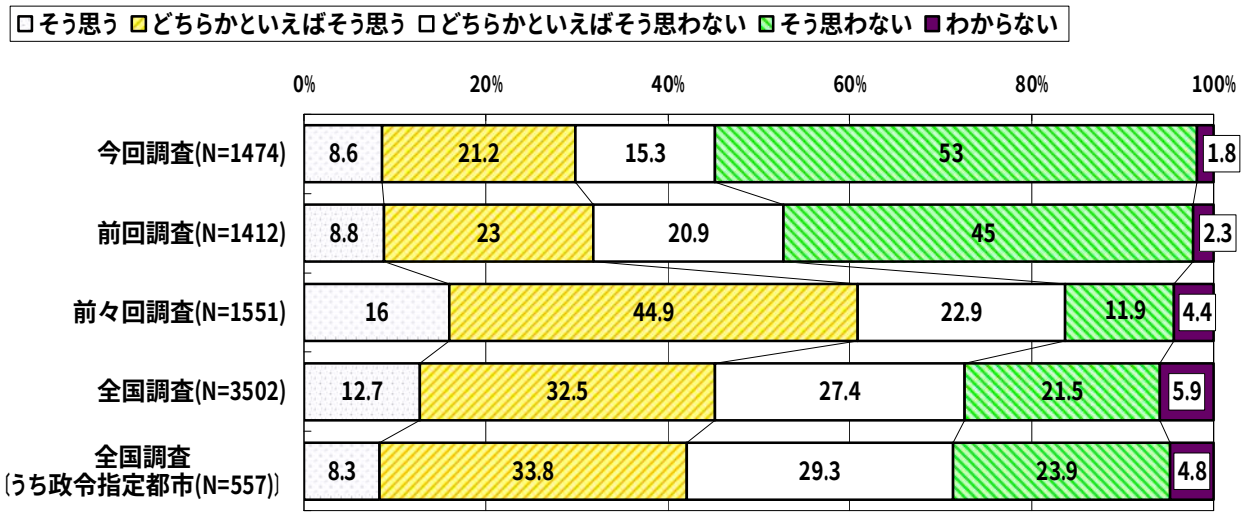
本来、(6) 「男と女の、どちらが外で働いても、どちらが家事・育児・介護をしてもよい」と(8)「女も外で働いたほうがよいが、子どもが小さいときは女が家にいるほうがよい」は矛盾する意見と受け取れるものであるが、この結果からは、家事･育児･介護といった家庭内の役割を女性固有のものと考えない一方で、乳幼児の世話に限定した場合は女性を主たる担い手とする人が男女ともに多いことが伺える。

(5) 男は外で働くもの、女は家庭を守るものだ



女性全体をみると、60歳代以下すべての年代で『否定派』が7割を超えているが、70歳代以上において、『肯定派』が『否定派』を上回っている。性別・年代別でみると、20歳代と60歳代で男女の意識の違いが大きくなっている。

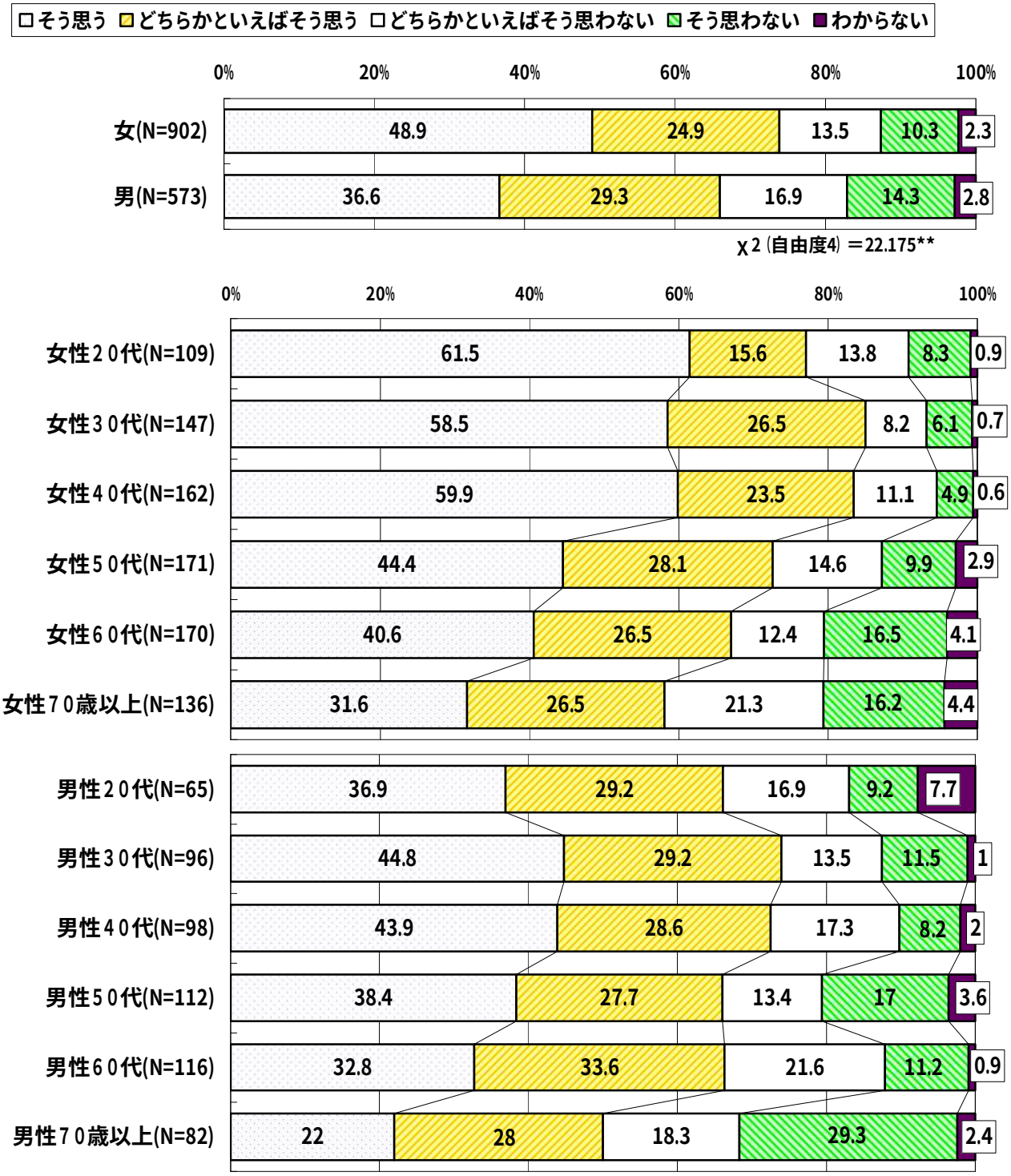
【前回･前々回･国との比較】



全体に関して前回調査と比較すると『否定派』は微増(65.9→68.3%)し、『肯定派』は微減(31.8→29.8%)している。

この項目は平成16年11月に国が実施した「男女共同参画社会に関する世論調査」と共通しているので比較すると、国の結果よりも『否定派』の割合がかなり高く(岡山市68.3%＞国48.9%)、政令指定都市に限った結果と比較しても、高くなっている(岡山市68.3%＞政令指定都市53.2%)。

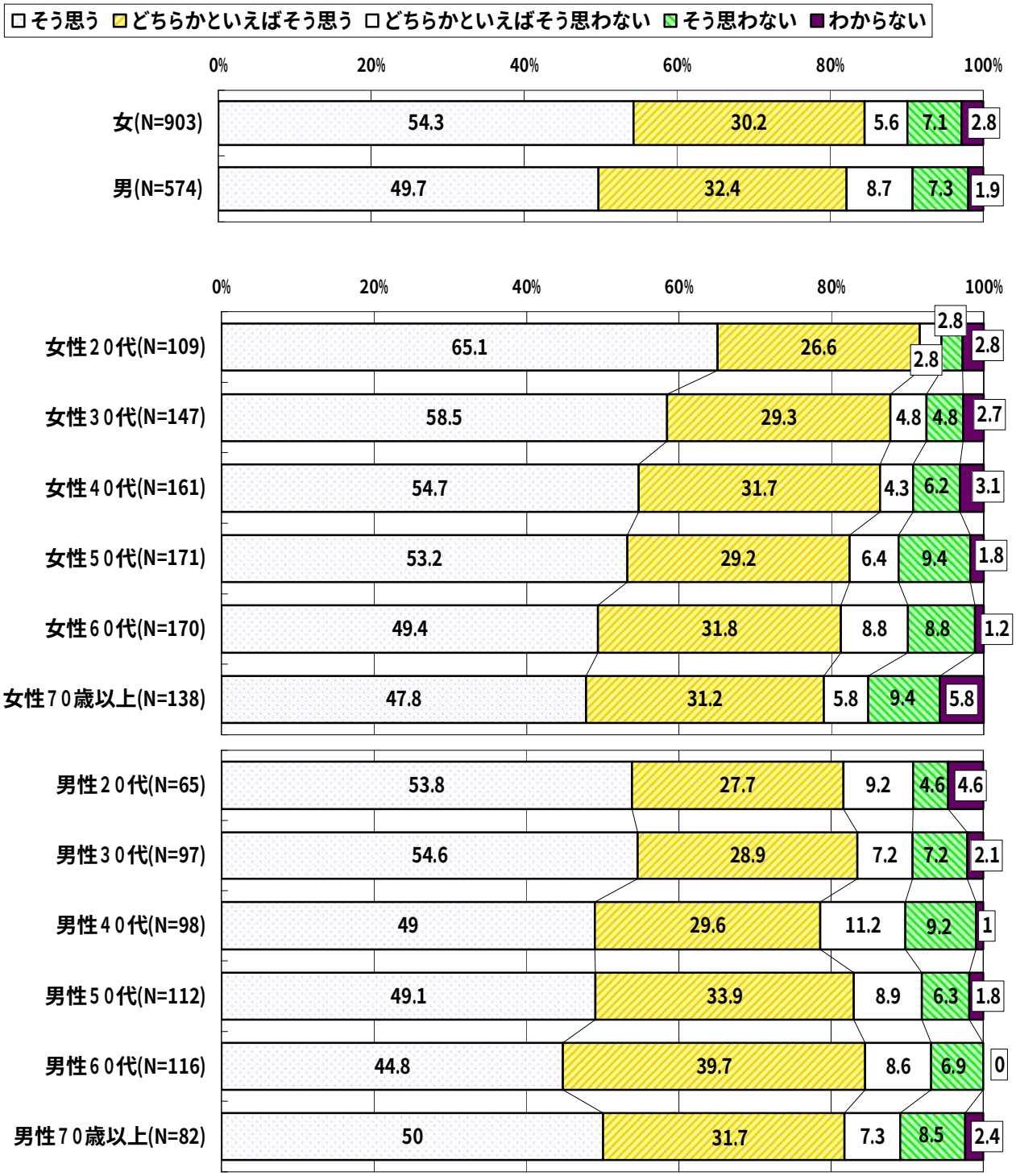
(6) 男と女の、どちらが外で働いても、どちらが家事・育児・介護をしてもよい



「そう思う」と答えた人の割合について、男女の違いが大きい項目である。

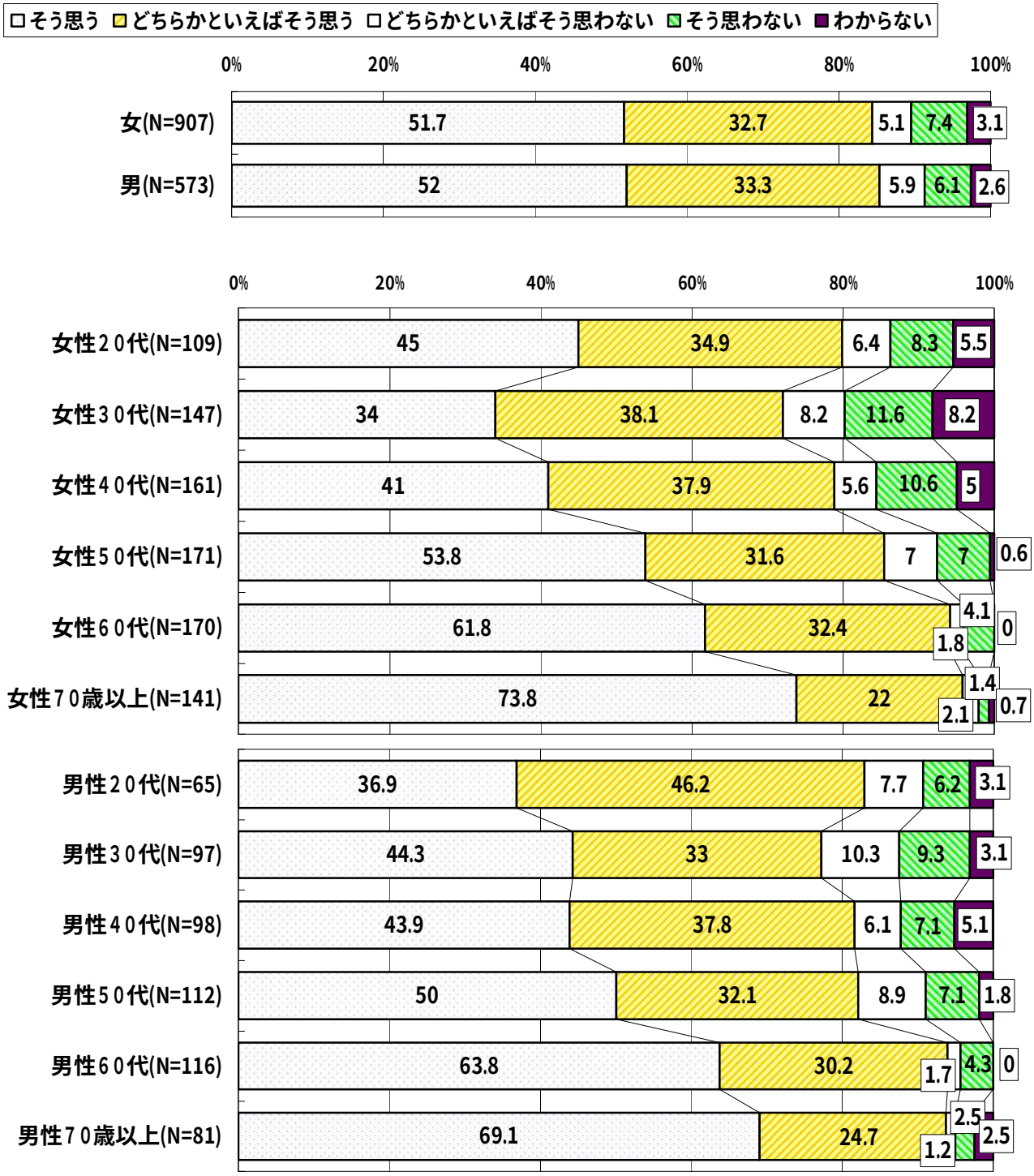
ただし、現実に子育て期にある回答者が多いと思われる30歳代・40歳代において男女とも『肯定派』の割合が高い。

(7) 男も女も、どちらも仕事と家庭を両立できるのがよい



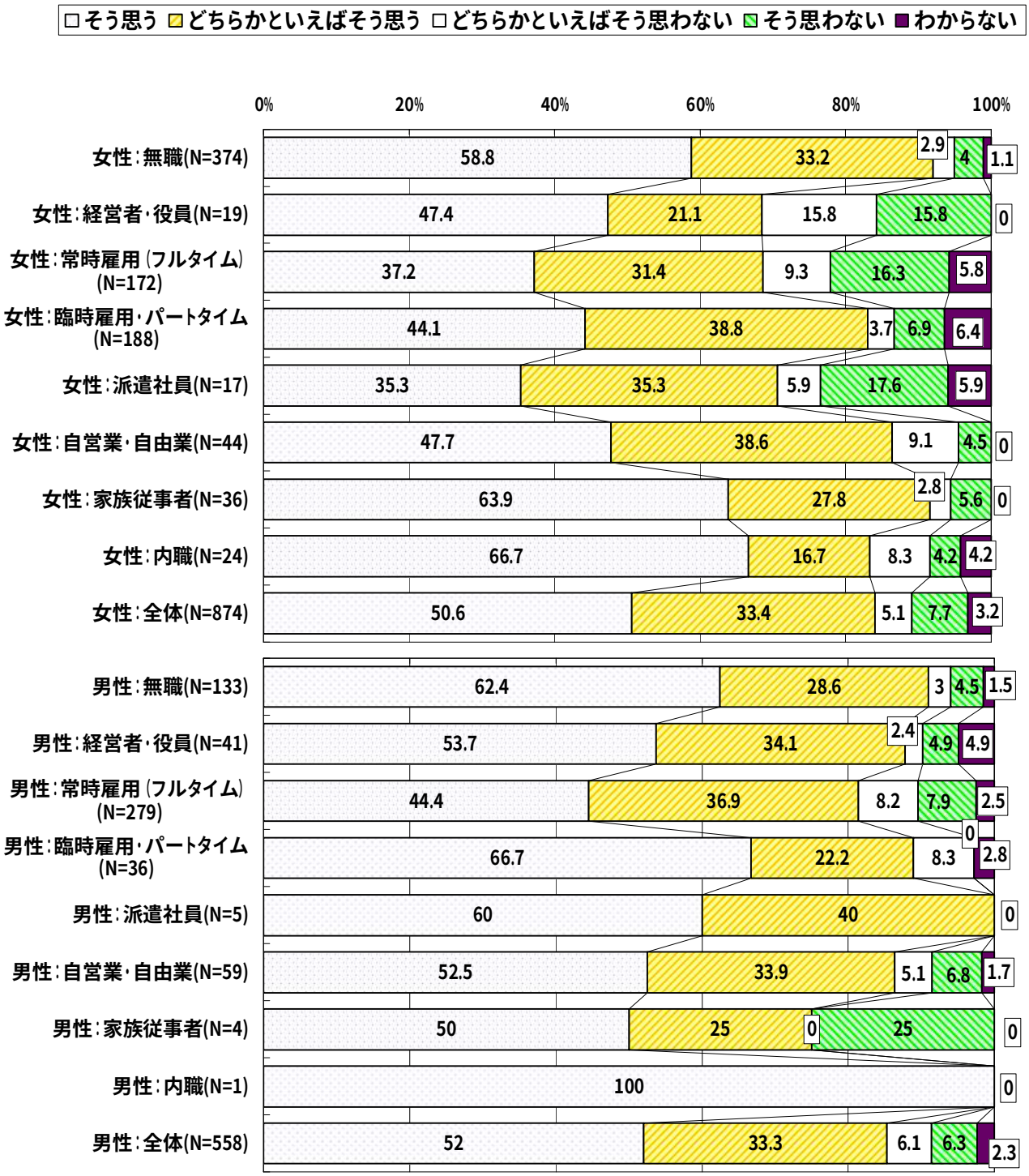
性別・年代別にみると、20歳代女性は9割以上が『肯定派』であるとともに、男女ともにすべての年代において『肯定派』がほぼ8割以上となっている。

(8) 女も外で働いた方がよいが、子どもが小さいときは女が家にいるほうがよい



性別による差のない項目である。性別・年代別にみると、男女ともに年代が上がるにつれて『肯定派』の割合が増える傾向にあるが、20歳代において、男女ともに30歳代・40歳代よりも『肯定派』の割合が高くなっていることは、注目される。

【性別×本人勤務形態別】

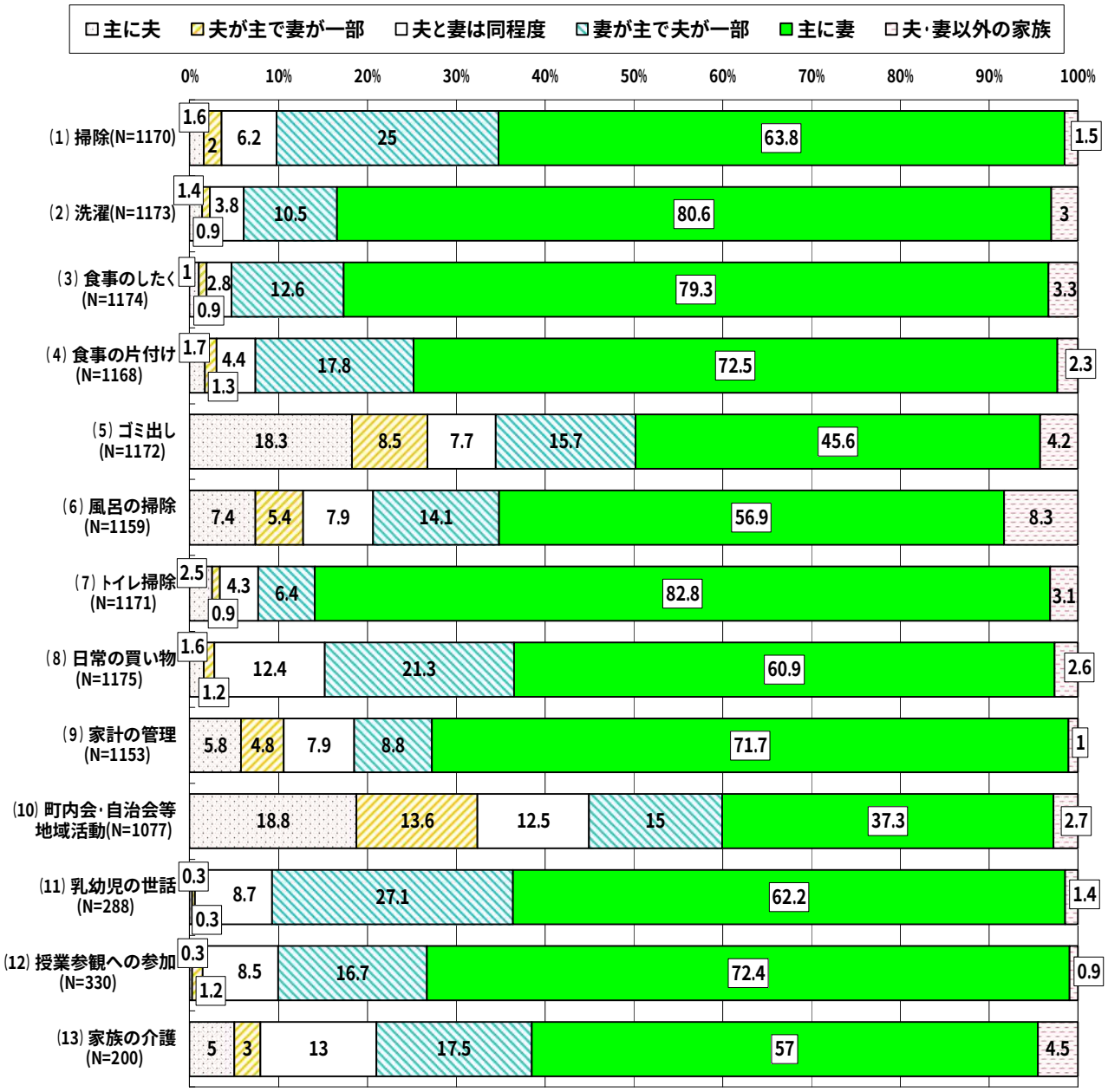


性別・本人勤務形態別にみると、経営者・役員、常時雇用（フルタイム）、派遣社員の女性は『肯定派』の割合が低い傾向にある。男性については、常時雇用（フルタイム）、家族従事者の『肯定派』が他の勤務形態の人よりも少ない。

３．家事分担について

問３　現在、配偶者（夫または妻、事実婚を含む）・パートナーのいる方におたずねします。あなたの家庭では、次の(１)から(13)をどのように分担していますか。それぞれについて、あてはまる番号を１つだけ選んで数字に○をつけてください。

【全体】



[年代別]

		主に夫	夫が主で妻が一部	夫と妻は同程度	妻が主で夫が一部	主に妻	夫･妻以外の家族
(1) 掃除	20代(N=67)	1.5	1.5	10.4	26.9	58.2	1.5
	30代(N=188)	1.1	0.5	6.4	22.9	67.6	1.6
	40代(N=223)	0.4	1.8	4.9	25.6	65.9	1.3
	50代(N=255)	2.7	1.2	2.4	22.4	68.6	2.7
	60代(N=248)	2.4	2.8	4.8	27.4	62.5	0
	70歳以上(N=164)	0.6	4.3	14.0	26.2	53.0	1.8
	全体(N=1145)	1.6	2.0	6.2	25.0	63.8	1.5
(2) 洗濯	20代(N=67)	0	0	9.0	13.4	77.6	0
	30代(N=187)	1.1	1.1	5.3	12.3	77.0	3.2
	40代(N=224)	0.4	0.4	3.6	12.5	77.2	5.8
	50代(N=257)	2.3	0.8	1.9	8.6	84.0	2.3
	60代(N=248)	2.4	1.2	3.2	10.1	82.7	0.4
	70歳以上(N=164)	0.6	1.2	4.3	8.5	81.1	4.3
	全体(N=1147)	1.4	0.9	3.8	10.5	80.5	2.9
(3) 食事のしたく	20代(N=66)	0	1.5	1.5	10.6	84.8	1.5
	30代(N=190)	0.5	1.1	3.2	14.2	77.4	3.7
	40代(N=224)	0.4	0.9	3.1	11.2	81.3	3.1
	50代(N=256)	2.3	0.4	2.3	10.9	79.7	4.3
	60代(N=246)	0.8	1.6	2.4	16.3	78.5	0.4
	70歳以上(N=166)	1.2	0.6	4.2	10.8	76.5	6.6
	全体(N=1148)	1.0	1.0	2.9	12.6	79.2	3.3
(4) 食事の片付け	20代(N=67)	3.0	3.0	4.5	25.4	62.7	1.5
	30代(N=188)	1.6	1.6	8.0	23.9	63.8	1.1
	40代(N=223)	0.4	1.3	4.0	17.9	73.1	3.1
	50代(N=255)	2.0	1.6	3.1	14.9	75.7	2.7
	60代(N=247)	2.8	1.2	2.0	13.4	80.6	0
	70歳以上(N=163)	1.2	0	6.7	19.0	67.5	5.5
	全体(N=1143)	1.7	1.3	4.5	17.8	72.4	2.3
(5) ゴミ出し	20代(N=67)	34.3	7.5	11.9	23.9	20.9	1.5
	30代(N=189)	25.9	9.0	11.1	10.6	37.0	6.3
	40代(N=221)	12.2	6.3	6.8	13.1	53.8	7.7
	50代(N=257)	15.6	8.9	5.8	15.6	51.4	2.7
	60代(N=248)	16.5	8.9	8.1	19.0	46.8	0.8
	70歳以上(N=164)	18.3	11.0	5.5	15.9	44.5	4.9
	全体(N=1146)	18.3	8.6	7.7	15.5	45.7	4.1
(6) 風呂の掃除	20代(N=66)	12.1	7.6	19.7	15.2	43.9	1.5
	30代(N=188)	6.4	9.6	9.6	14.9	47.9	11.7
	40代(N=218)	5.0	1.8	9.2	16.1	50.0	17.9
	50代(N=253)	5.9	3.6	6.3	15.4	62.8	5.9
	60代(N=247)	9.3	4.9	6.1	13.0	65.2	1.6
	70歳以上(N=161)	8.1	8.1	6.2	9.3	60.2	8.1
	全体(N=1133)	7.2	5.4	8.1	14.0	56.9	8.3
(7) トイレ掃除	20代(N=66)	4.5	1.5	6.1	7.6	78.8	1.5
	30代(N=189)	2.1	1.6	5.3	4.2	84.1	2.6
	40代(N=220)	2.7	0.9	5.9	4.5	81.4	4.5
	50代(N=256)	2.7	0.8	3.1	5.1	85.2	3.1
	60代(N=248)	2.0	1.2	2.0	8.9	85.5	0.4
	70歳以上(N=166)	2.4	0	5.4	8.4	78.3	5.4
	全体(N=1145)	2.5	1.0	4.3	6.3	83.0	3.0
(8) 日常の買い物	20代(N=67)	1.5	0	11.9	23.9	62.7	0
	30代(N=189)	0.5	0.5	12.7	21.2	63.5	1.6
	40代(N=224)	0	0.4	11.2	16.5	69.6	2.2
	50代(N=256)	2.0	0.4	7.4	22.3	64.1	3.9
	60代(N=246)	1.2	1.6	15.9	26.0	54.9	0.4
	70歳以上(N=167)	5.4	3.6	16.2	19.8	49.1	6.0
	全体(N=1149)	1.7	1.1	12.4	21.5	60.8	2.5

(%)

		主に夫	夫が主で妻が一部	夫と妻は同程度	妻が主で夫が一部	主に妻	夫･妻以外の家族
⑼ 家計の管理	20代(N=65)	10.8	0	3.1	9.2	75.4	1.5
	30代(N=186)	5.4	4.8	8.6	3.8	75.8	1.6
	40代(N=221)	3.6	2.7	7.2	9.0	76.5	0.9
	50代(N=253)	3.6	5.9	7.1	9.5	73.1	0.8
	60代(N=242)	6.2	4.1	9.1	11.2	69.4	0
	70歳以上(N=162)	10.5	7.4	9.3	8.0	63.0	1.9
	全体(N=1129)	5.8	4.6	7.9	8.6	72.1	1.0
⑽ 町内会･自治会等地域活動	20代(N=46)	10.9	4.3	23.9	17.4	41.3	2.2
	30代(N=157)	12.7	7.0	15.9	16.6	43.3	4.5
	40代(N=216)	11.6	12.5	7.9	16.7	47.7	3.7
	50代(N=246)	18.3	16.3	10.6	17.5	35.0	2.4
	60代(N=234)	23.5	17.5	12.4	14.5	31.6	0.4
	70歳以上(N=152)	29.6	15.1	14.5	7.9	29.6	3.3
	全体(N=1051)	18.6	13.7	12.4	15.1	37.6	2.7
⑾ 乳幼児の世話	20代(N=38)	0	0	21.1	36.8	42.1	0
	30代(N=118)	0	0.8	10.2	33.1	55.1	0.8
	40代(N=48)	0	0	4.2	22.9	72.9	0
	50代(N=27)	0	0	3.7	18.5	74.1	3.7
	60代(N=25)	4.0	0	4.0	20.0	72.0	0
	70歳以上(N=25)	0	0	4.0	12.0	80.0	4.0
	全体(N=281)	0.4	0.4	8.9	27.4	61.9	1.1
⑿ 授業参観への参加	20代(N=8)	0	0	12.5	25.0	62.5	0
	30代(N=86)	1.2	1.2	9.3	18.6	68.6	1.2
	40代(N=139)	0	0	6.5	18.7	74.8	0
	50代(N=39)	0	2.6	5.1	20.5	71.8	0
	60代(N=24)	0	0	12.5	8.3	79.2	0
	70歳以上(N=25)	0	8.0	8.0	4.0	76.0	4.0
	全体(N=321)	0.3	1.2	7.8	17.1	72.9	0.6
⒀ 家族の介護	20代(N=4)	0	0	50.0	25.0	25.0	0
	30代(N=11)	0	0	0	0	81.8	18.2
	40代(N=21)	0	0	19.0	28.6	47.6	4.8
	50代(N=60)	3.3	1.7	13.3	25.0	51.7	5.0
	60代(N=59)	1.7	6.8	8.5	16.9	66.1	0
	70歳以上(N=41)	17.1	2.4	17.1	7.3	51.2	4.9
	全体(N=196)	5.1	3.1	13.3	17.9	56.6	4.1

(%)

「夫が主に担当している」「夫が主で妻が一部を分担している」を『夫中心』、「妻が主に担当している」「妻が主で夫が一部を担当している」を『妻中心』と定義すると、全項目にわたって『妻中心』が5割を超えている。『妻中心』が9割を超えるのは、(2)洗濯、(3)食事のしたく、(4)食事の片付けとなっており、(1)掃除、(7)トイレ掃除、(11)乳幼児の世話、(12)授業参観への参加もほぼ9割が『妻中心』となっている。

「夫が主に担当している」「夫が主で妻が一部を分担している」「妻と夫が同じ程度に分担している」「妻が主で夫が一部を担当している」を選択した人の割合をみると、(10)町内会・自治会等地域活動、(5)ゴミ出し、(13)家族の介護、(8)日常の買い物、(11)乳幼児の世話、(1)掃除、(6)風呂の掃除の順に高くなっているが、このうち『夫中心』『夫と妻は同程度』の割合が3割を超えるのは(5)(10)のみである。(5)ゴミ出しについては20歳代(41.8%)、30歳代(34.9%)で、(10)町内会・自治会等地域活動については、60歳代(41.0%)、70歳以上(44.7%)で『夫中心』の割合が高い。

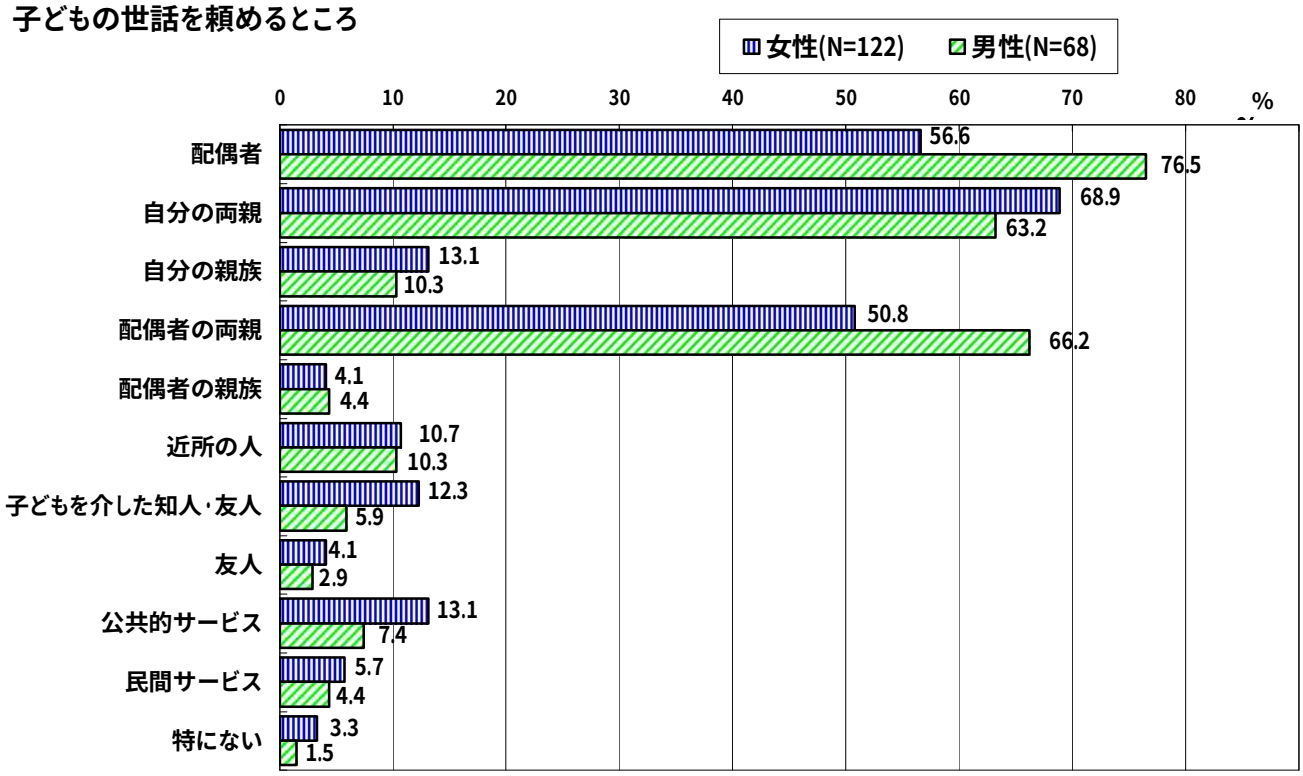
２．で示されたような、固定的な性別役割分担への否定的意見や男女ともに仕事・家庭を両立させたいと願う気持ちとは裏腹に、現実の家事分担はごく一部を除いて女性が担っている状況が見て取れる。

４．子育てについて

問６　就学前の子どもがいる方におたずねします。
あなたが、急な用事や急病などで、子どもの世話がどうしてもできなくなったとき、子どもの世話を一時的に頼めるのは、どのようなところが考えられますか。次の中からあてはまる番号をすべて選んで数字に○をつけてください。(○はいくつでも)

就学前の子どもがいる人に対して、急な用事や急病の際に子どもの世話が頼める人が身近にどれぐらいいるかを尋ねている。

子どもの世話を頼めるところ



子どもの世話を頼める身近な人との関係(続柄)を性別で比較すると、女性は、①自分の両親②配偶者③配偶者の両親④自分の親族⑤子どもを介した知人・友人⑥近所の人⑦配偶者の親族⑦友人の順に、男性は、①配偶者②配偶者の両親③自分の両親④自分の親族④近所の人⑥子どもを介した知人・友人⑦配偶者の親族⑧友人の順となる。

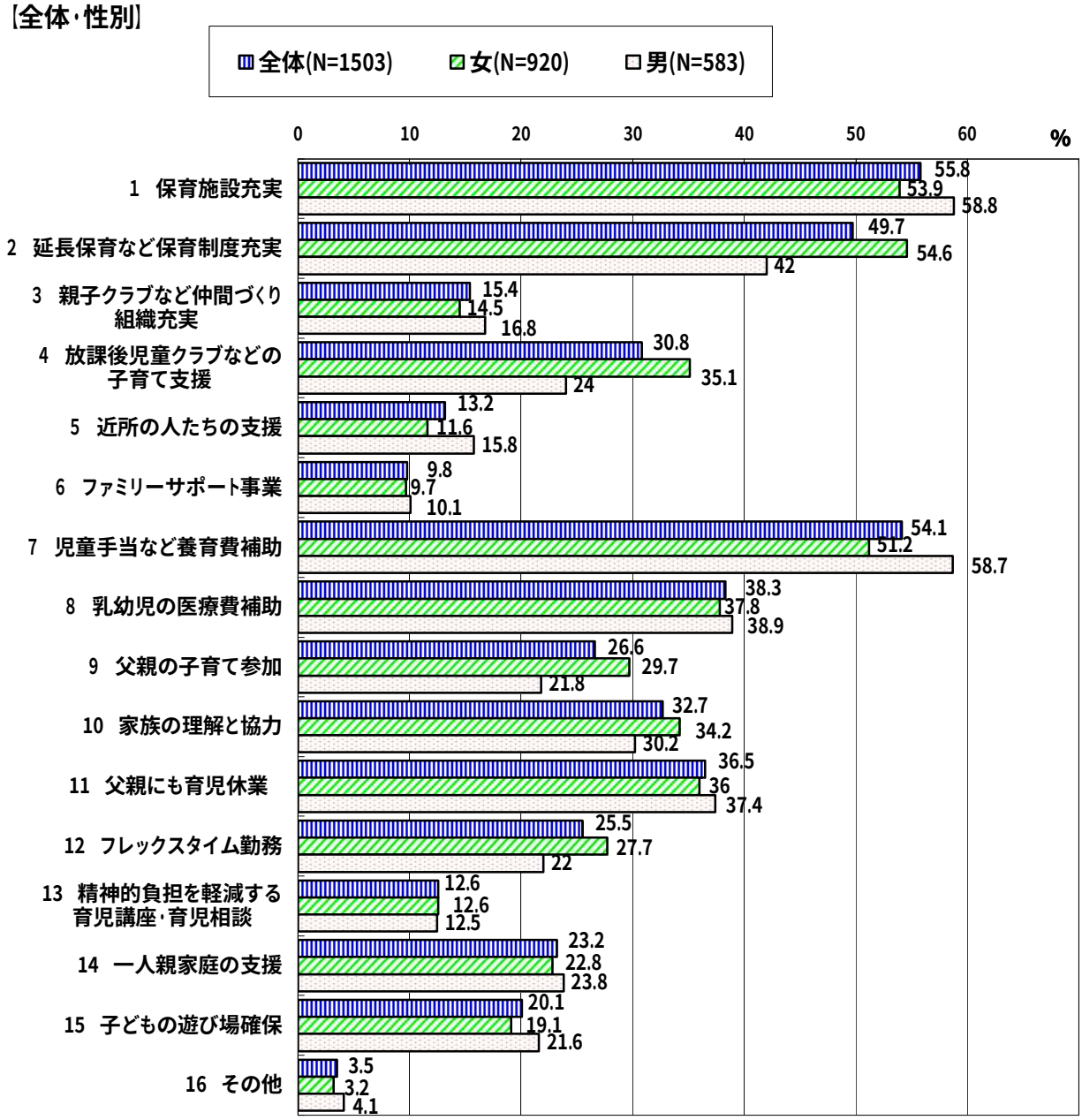
女性は配偶者よりも自分の両親に頼るのに対し、男性は配偶者を頼る傾向があり、配偶者の両親に自分の両親と同等以上に頼っている。ここからは、子育てが女性の領域として意識されていることが読みとれる。

また、男女ともに配偶者の親族よりも子どもを介した知人・友人や近所の人を頼る傾向にある。

なお、公共的サービスや民間サービスについては、子育て最中の人を対象に尋ねているにもかかわらず、あまり選択されない傾向があり、公的なサービスや民間サービスが「急な用事や急病のとき」には利用しにくいと認識されている状況を示している。

問７　人々が安心して子どもを産み育てられる環境を整えるには、どんなことが必要だと思いますか。次にあげた中から特に必要だと思うものを５つまで選んで数字に○をつけてください。

【全体･性別】



安心して子どもを産み育てるために必要なこととして、多いものから順に、「保育施設の充実」(55.8%)、「児童手当などの養育費の補助」(54.1%)、「延長保育・病後児保育など保育制度の充実」(49.7%)、「乳幼児の医療費補助」(38.3%)、「母親だけでなく父親も育児休業を積極的に取得できるような職場環境」(36.5%)などが挙げられる。

性別にみると、男性は女性に比べて「児童手当などの養育費の補助」(58.7%)、「保育施設の充実」(58.8%)を挙げる人が多い。他方、女性は男性に比べて「延長保育・病後児保育など保育制度の充実」(54.6%)、「放課後児童クラブなどの子育て支援の充実」(35.1%)、「父親の子育て参加」(29.7%)、「子育て中のフレックスタイム勤務」（27.7%)を挙げる人が多い。

なお、「その他」の自由記述欄に記入された回答としては、教育費の低減を求めるものが最も多かった。

【ライフステージ別】

	独身期	家族形成期	家族形成第一期	家族形成第二期	家族形成第三期	家族成熟期	高齢期	全体
	N=127	N=57	N=190	N=171	N=128	N=141	N=287	N=1101
1 保育施設充実	53.5	57.9	50.5	43.3	60.9	55.3	64.1	55.5
2 延長保育など保育制度充実	44.9	54.4	47.9	51.5	58.6	61.7	48.1	51.5
3 親子クラブなど仲間づくり組織充実	11.8	15.8	18.9	11.1	13.3	13.5	18.5	15.3
4 放課後児童クラブなどの子育て支援	14.2	15.8	32.1	41.5	34.4	44.0	35.9	33.4
5 近所の人たちの支援	14.2	8.8	8.4	14.0	11.7	8.5	17.1	12.6
6 ファミリーサポート事業	10.2	5.3	10.0	10.5	14.1	12.1	4.9	9.3
7 児童手当など養育費補助	52.8	57.9	69.5	56.7	47.7	47.5	54.4	55.7
8 乳幼児の医療費補助	42.5	40.4	63.2	35.1	31.3	35.5	34.1	40.4
9 父親の子育て参加	37.8	31.6	32.1	27.5	28.1	27.7	22.0	28.3
10 家族の理解と協力	37.8	31.6	24.7	33.9	34.4	28.4	34.8	32.2
11 父親にも育児休業	47.2	35.1	36.3	35.7	40.6	41.1	29.3	36.7
12 フレックスタイム勤務	37.8	40.4	25.8	24.6	29.7	32.6	17.1	26.8
13 精神的負担を軽減する育児講座・育児相談	22.0	8.8	5.8	9.4	6.3	16.3	14.3	12.0
14 一人親家庭の支援	21.3	22.8	13.2	27.5	27.3	24.8	20.6	21.9
15 子どもの遊び場確保	19.7	14.0	20.0	22.8	14.8	21.3	24.0	20.7
16 その他	3.1	8.8	2.6	7.6	3.9	2.8	1.0	3.5

(%)

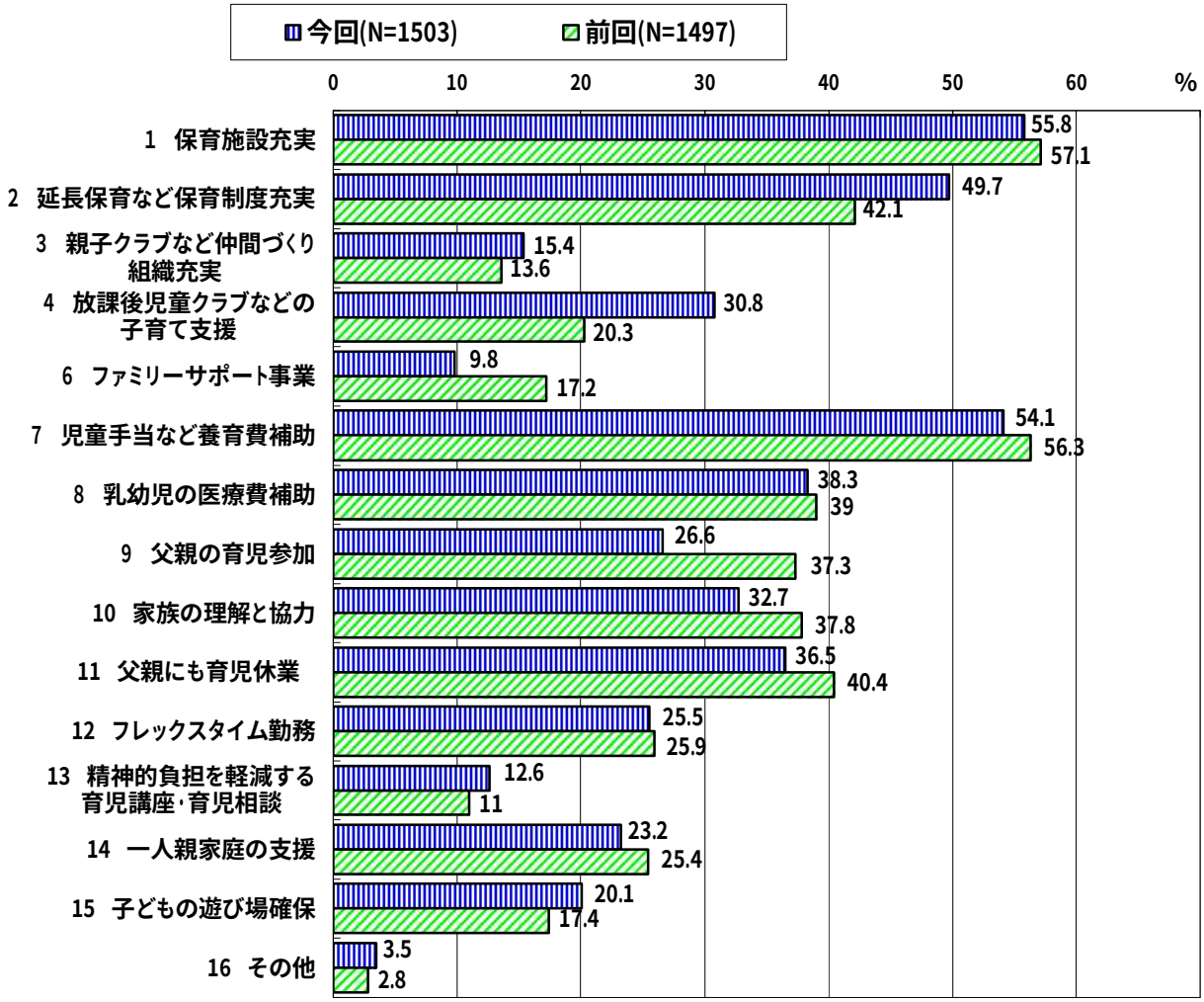
子育てをするのに何が望まれているかをライフステージごとにみると、末子が未就学児の家族形成一期の人および末子が小中学生の家族形成二期の人は、第一に「児童手当などの養育費の補助」を挙げており、「保育施設の充実」、「延長保育・病後児保育など保育制度の充実」、「母親だけでなく父親も育児休業を積極的に取得できるような職場環境」を共通して求めている。さらに家族形成一期の人は「乳幼児の医療費補助」を、家族形成二期の人は「放課後児童クラブなどの子育て支援の充実」を求める声が強く、それぞれに現在直面している状況への支援を望んでいるといえる。

子どもをもたない家族形成期の人は、他のライフステージの人に比べて、「子育て中のフレックスタイム勤務」を望む人の割合が高い。

独身期の人は、他のライフステージの人に比べて、「母親だけでなく父親も育児休業を積極的に取得できるような職場環境」、「父親の子育て参加」を望む声が強い。

このように、回答者の属性に応じた認識の違いが認められる一方で、「保育施設の充実」「延長保育・病後児保育など保育制度の充実」「児童手当などの養育費の補助」といった項目に関しては、高齢期までを含むすべてのライフステージの回答者が高い支持を寄せていることにも注目すべきである。

【前回との比較】



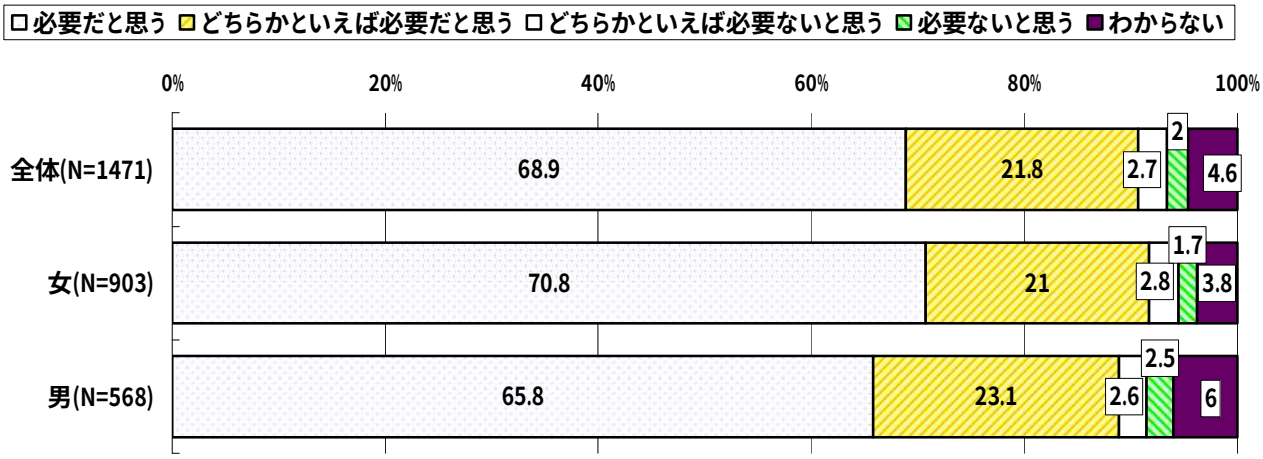
前回調査と比較すると、「延長保育・病後児保育など保育制度の充実」(49.7%)、「放課後児童クラブなどの子育て支援の充実」(30.8%)を望む割合が高くなっている。

また、「父親の子育て参加」(26.6%)、「ファミリーサポート事業の充実」(9.8%)については望む人の割合が低くなっている。

５．女性の健康について

問８　医療機関では、これまでの婦人科とは別に、いわゆる婦人科系の病気以外の病気や悩みに関して、女性特有の身体症状に詳しい医師をそろえた「女性専用の外来」を設けるところが、最近増えてきています。あなたは、こうした「女性専用の外来診療」について、どのように思いますか。次の中からあてはまる番号を１つだけ選んで数字に○をつけてください。

女性専用外来について

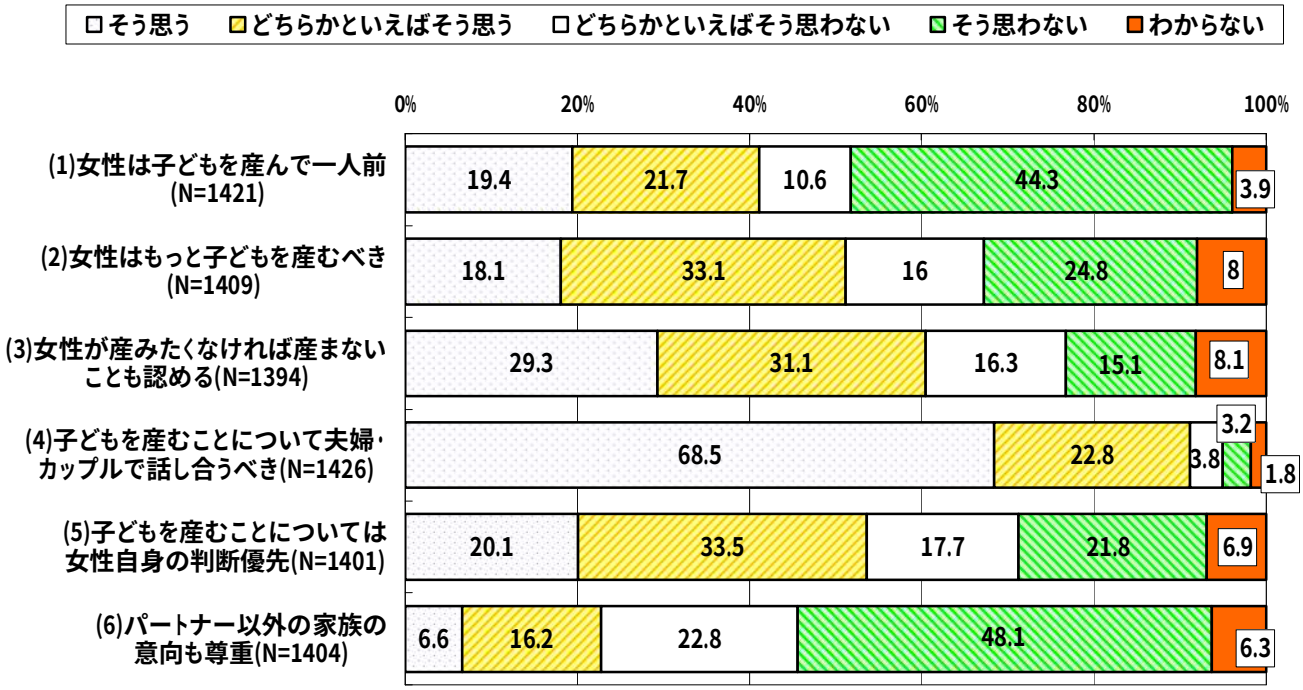


女性と男性の生物学的・生理学的差異や社会生活の違いから、疾患や病態、薬物作用などにおいても男女間に違いが存在するということを考慮した医療（性差医療）の観点から「女性専用外来」の必要性について尋ねている。

「必要だと思う」「どちらかといえば必要だと思う」を『肯定派』、「必要ないと思う」「どちらかといえば必要ないと思う」を『否定派』と定義すると、全体では『肯定派』が9割を超えている。つまり、全体に女性専用の外来診療を設けることへの支持は高いといえる。

問９　近年、リプロダクティブ・ヘルス／ライツという概念が提唱されていますが、女性が子どもを産むことに関しては、さまざまな意見があります。あなたは次の　(１)から(６)の意見についてどのように思いますか。それぞれについて、あてはまる番号を１つだけ選んで数字に○をつけてください。

【全体】

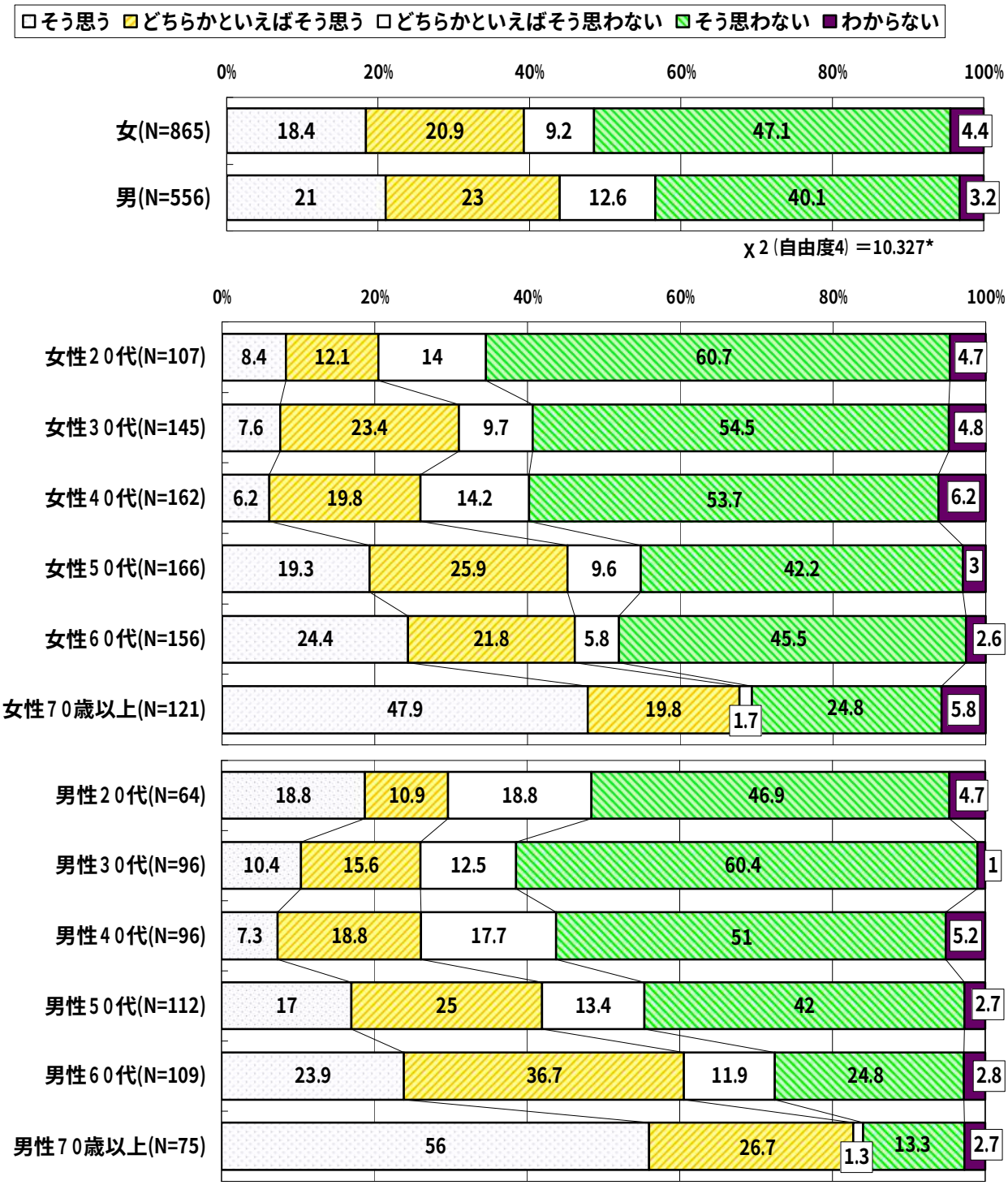


リプロダクティブ・ヘルス／ライツ（性と生殖に関する健康・権利）に関する質問である。「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を『肯定派』、「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」を『否定派』と定義すると、『肯定派』が『否定派』を大きく上回るのは、(3)「ライフスタイルは多様化しているので、女性が産みたくなければ産まないことも認めるべきだ」（肯定派60.4%＞否定派31.4%）、(4)「子どもを産むか産まないかは、夫婦・カップルがよく話し合って決めることである」（肯定派91.3%＞否定派7.0%）、(5)「子どもを産むか産まないかは、最終的には女性自身の考えや判断を優先すべきである」（肯定派53.6%＞否定派39.5%）の3項目である。(2)「少子化によって、労働人口や年金制度の問題が生じるから女性はもっと子どもを産むべきだ」については、全体では肯定派51.2%、否定派40.8%となっているものの、20歳代～40歳代の女性および30歳代・40歳代の男性についてはいずれも『否定派』のほうが5割を超えている。

『否定派』が『肯定派』を上回るのは、(1)「女性は子どもを産んでこそ一人前である」（肯定派41.1%＜否定派54.9%）、(6)「子どもを産むか産まないは、パートナー以外の家族の意向も尊重すべきだ」（肯定派22.8%＜否定派70.9%）の2項目である。

全体としては当事者の意向を重視する意見が主流といえるだろう。

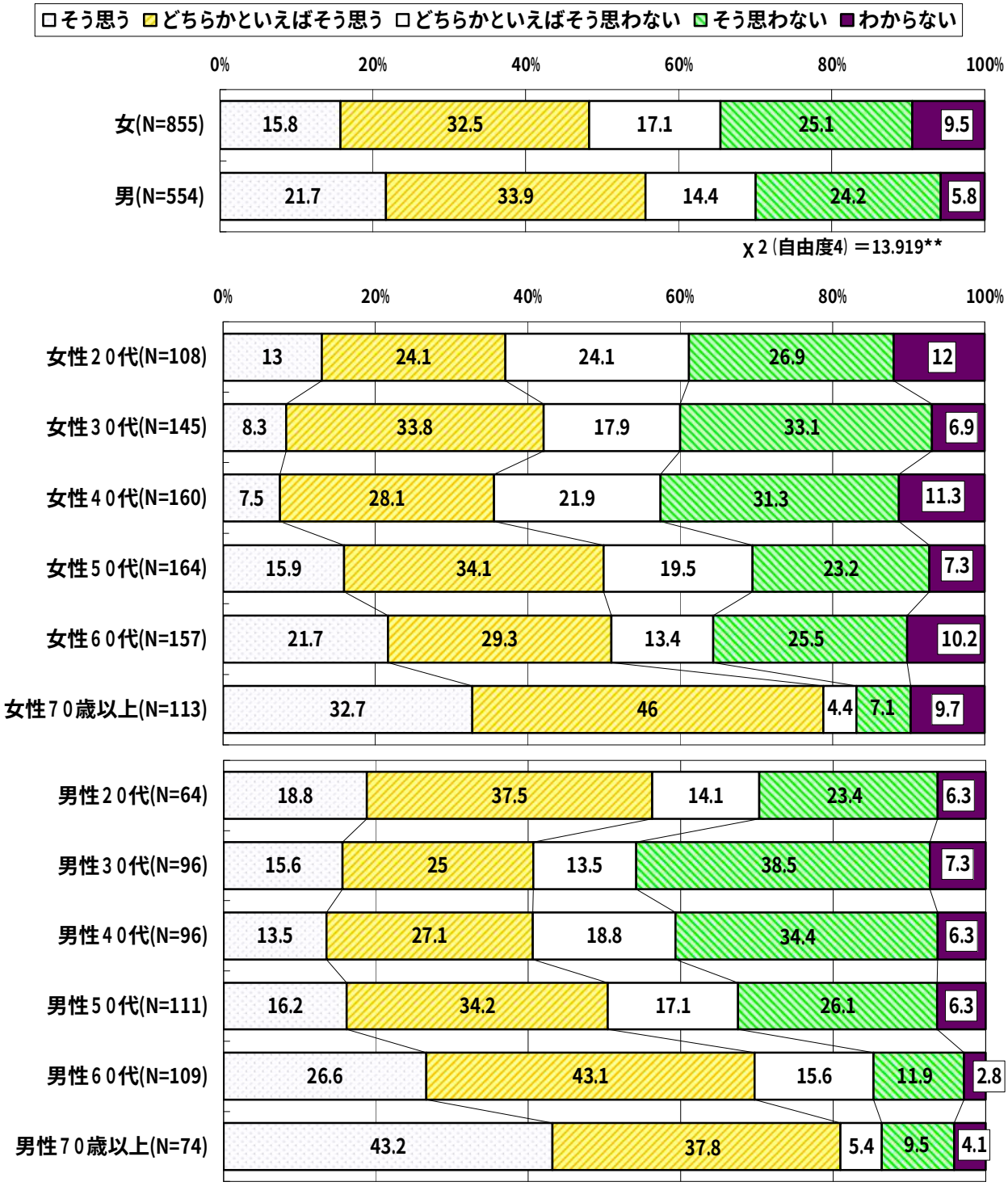
(1) 女性は子どもを産んでこそ一人前である



「女性は子どもを産んでこそ一人前」という考え方への支持･不支持は、女性の場合60歳代以下と70歳以上、男性の場合50歳代以下と60歳代以上の間で大きく分かれる。

特に20歳代の女性では4人のうちの3人が『否定派』である。

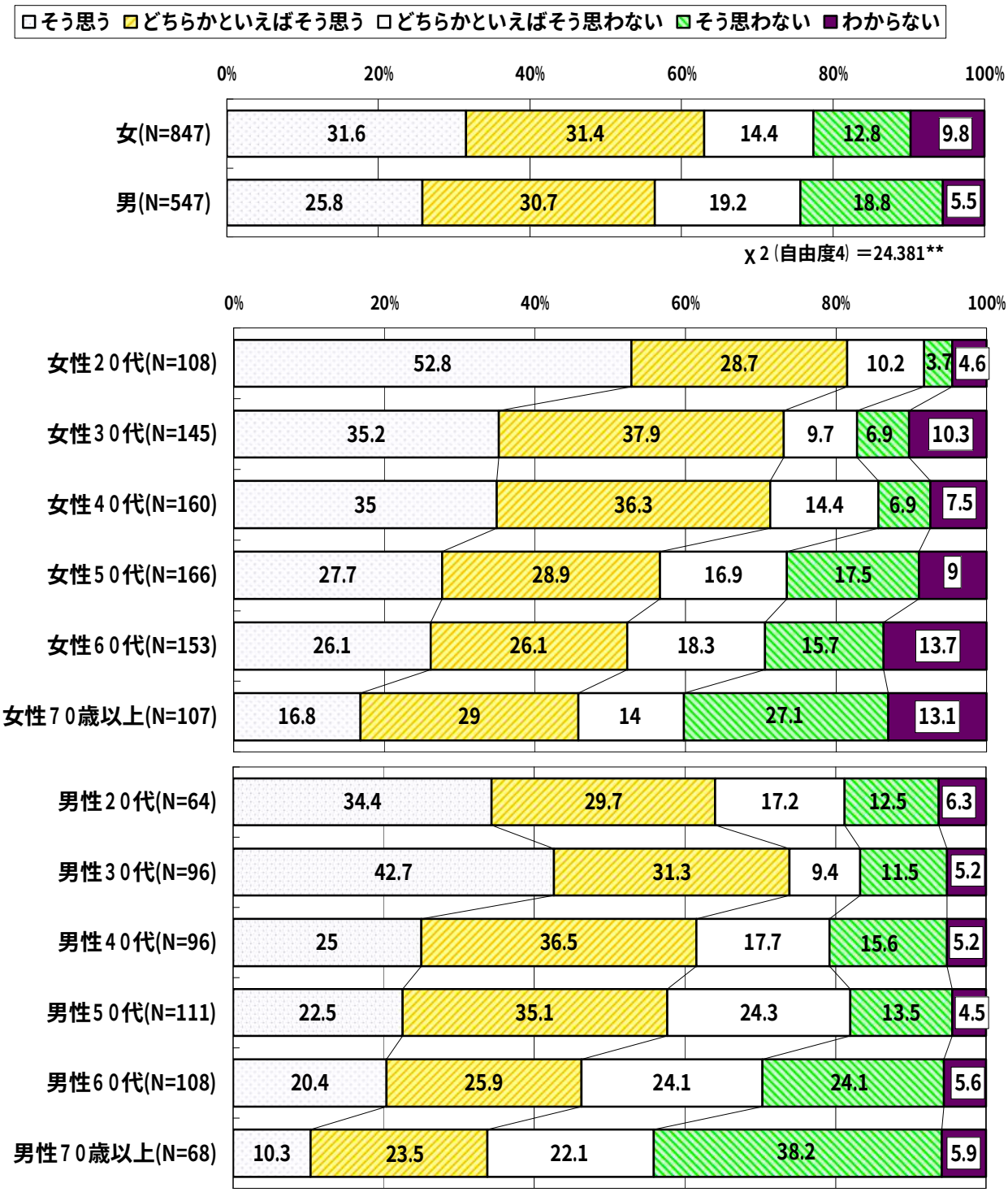
(2) 少子化によって、労働人口や年金制度の問題が生じるから女性はもっと子どもを産むべきだ



性別・年代別にみると、女性は40歳代以下では『否定派』が『肯定派』を上回っているのに対し、50歳代以上では『肯定派』が『否定派』を上回っており、特に70歳代以上では『肯定派』が8割近くを占めている。

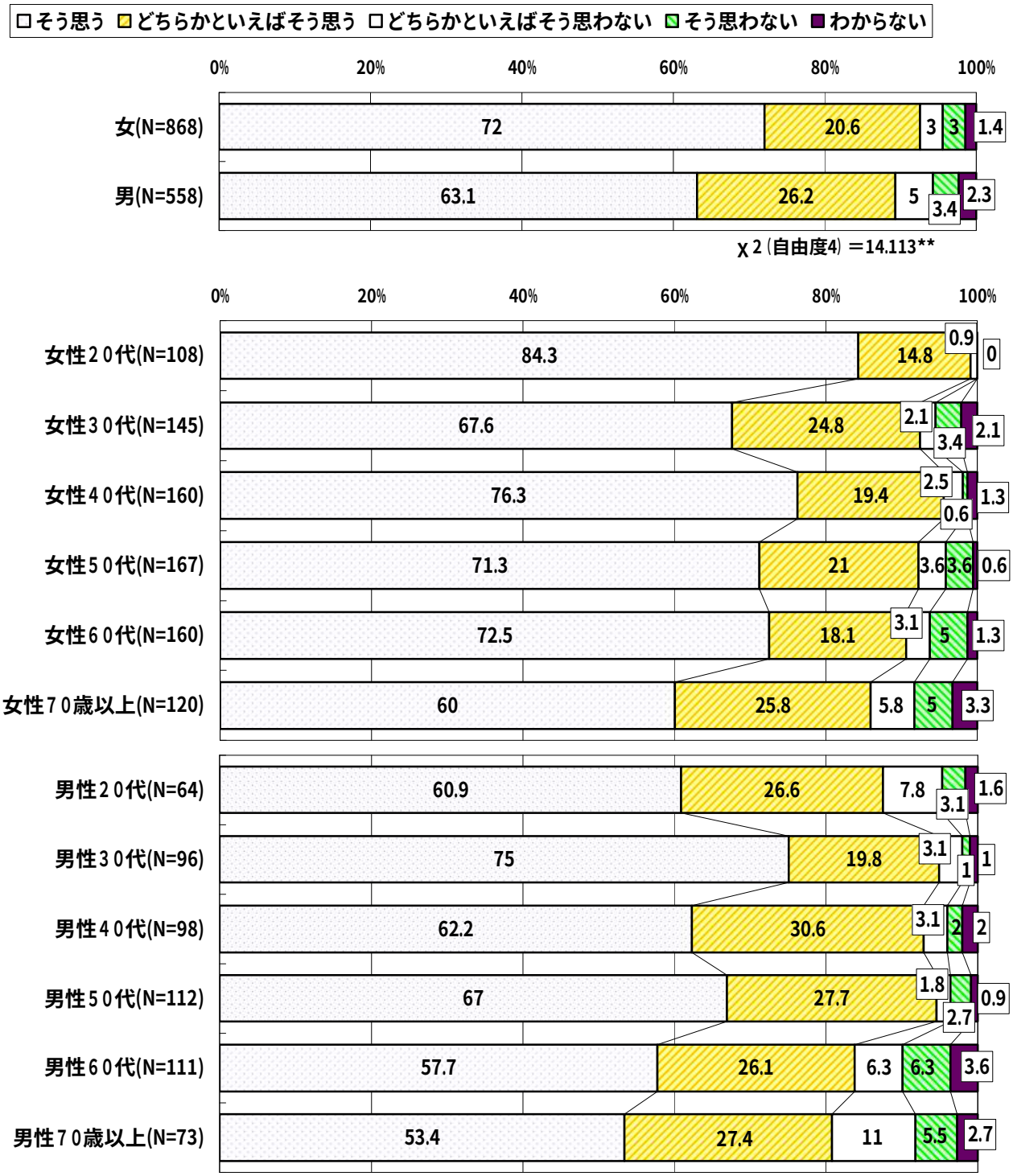
男性は年代が上がるにつれて『肯定派』の割合が増える傾向にある。ただし、20歳代においては『肯定派』の割合が高くなっている。

(3) ライフスタイルは多様化しているので、女性が産みたくなければ産まないことも認めるべきだ



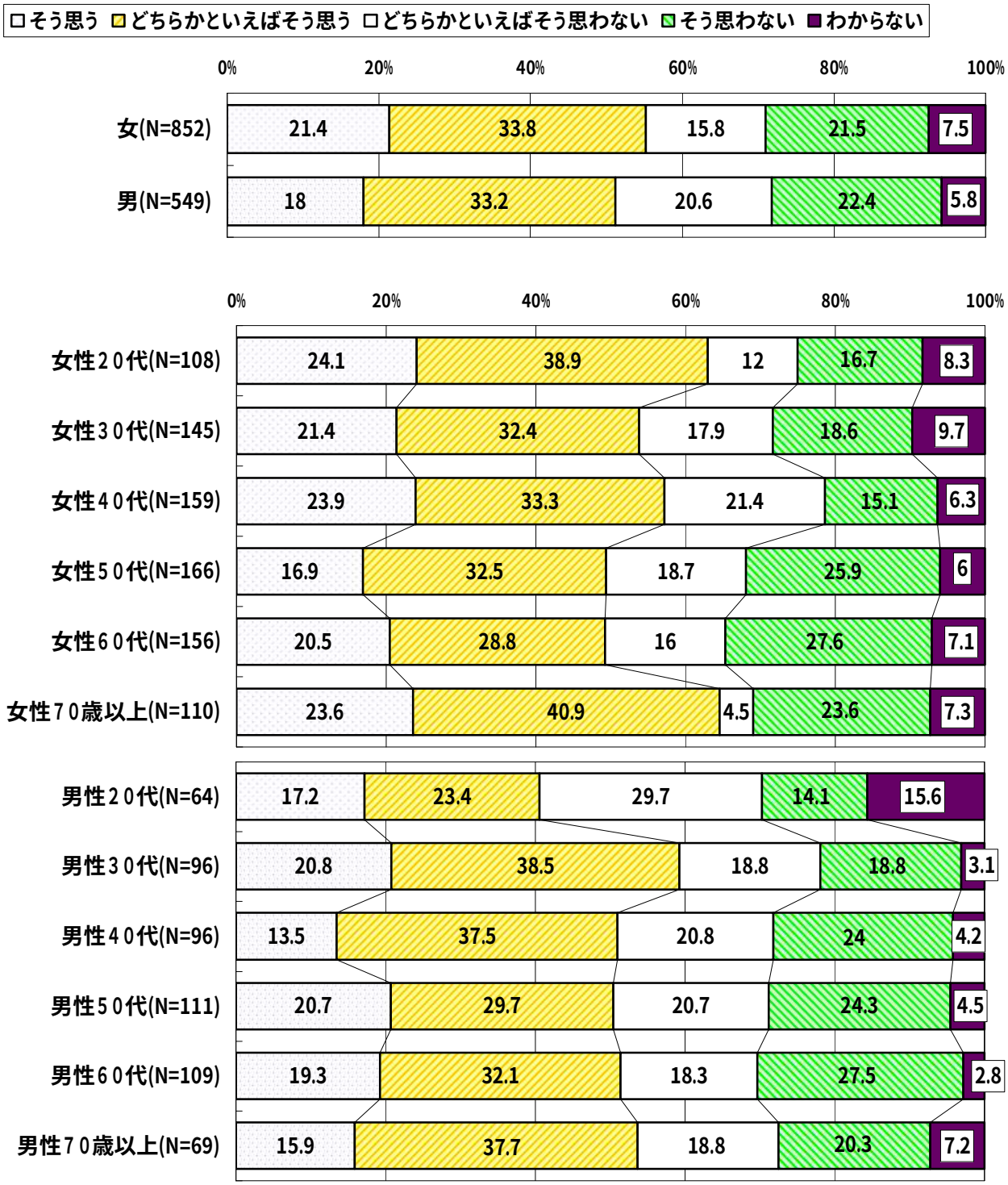
「そう思う」と回答した人の割合は、20歳代女性と30歳代男性において高くなっていることは特筆される。

(4) 子どもを産むか産まないかは、夫婦・カップルがよく話し合って決めることである



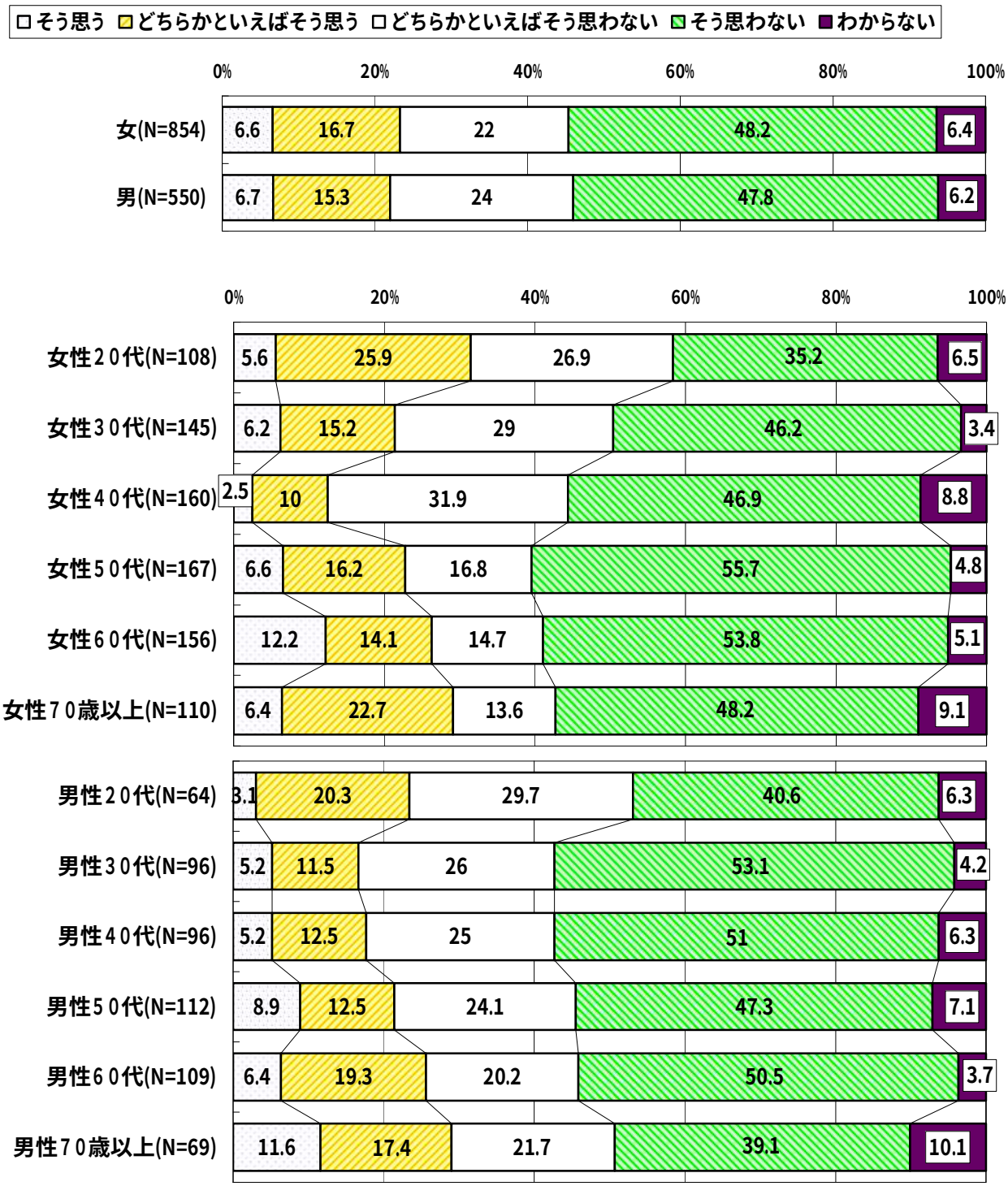
男女ともにすべての年代で『肯定派』が8割を超えている。

(5) 子どもを産むか産まないかは、最終的には女性自身の考えや判断を優先すべきである



性別・年代別にみると、20歳代男性を除きすべての年代の男女で『肯定派』が『否定派』を上回っている。

(6) 子どもを産むか産まないかは、パートナー以外の家族の意向も尊重すべきだ



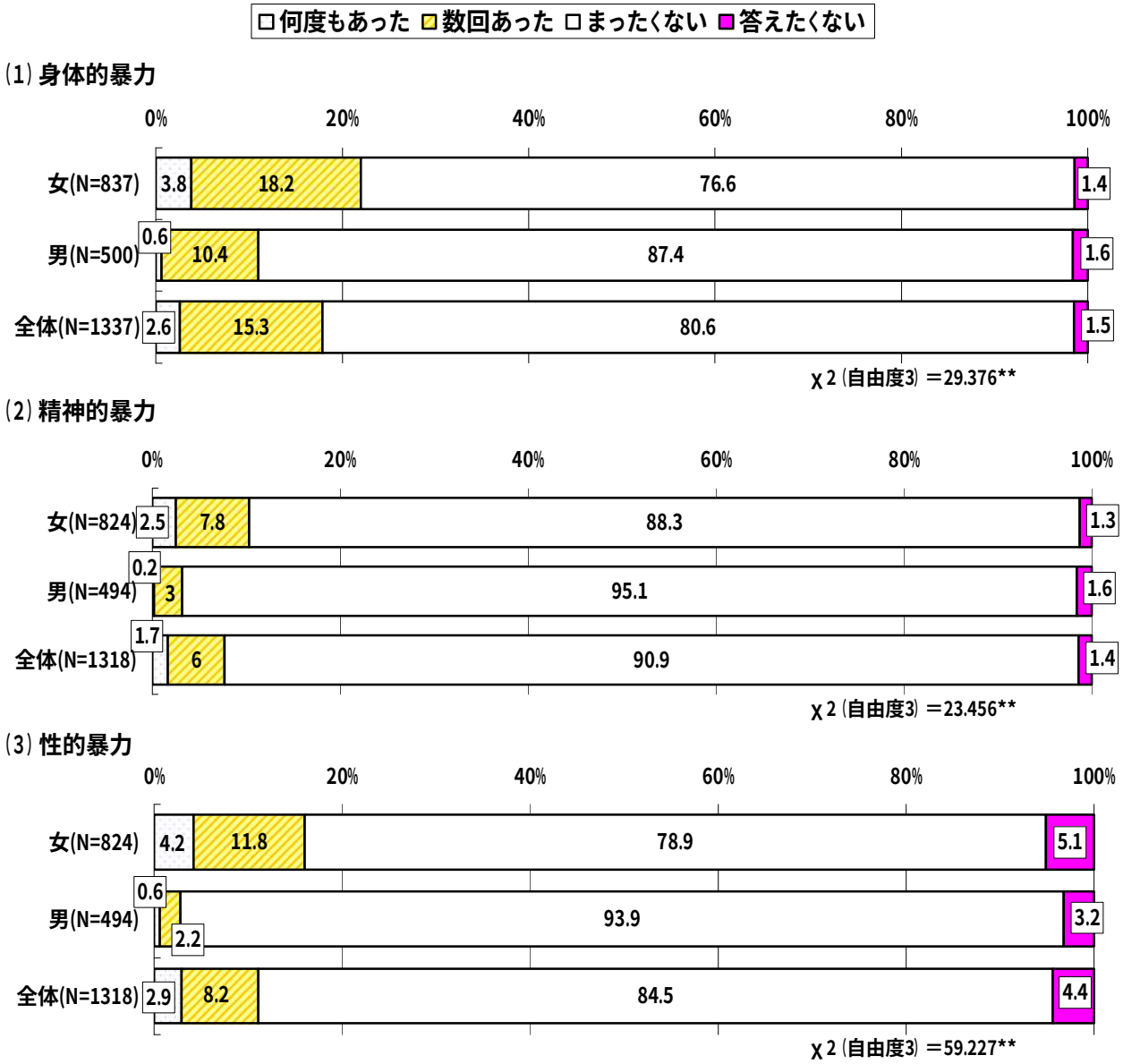
性別による差がない項目である。全体的に『否定派』の割合が高くなっているが、40歳代の女性及び30歳代・40歳代の男性は他の年代以上に『否定派』が多い。

一方で、20歳代は男女ともに『肯定派』の割合が高くなっており、子育てについて親の支援を期待するなど、総じて子育てへの不安が要因であるとも考えられる。

６．配偶者からの暴力（ＤＶ）について

問１１　現在、配偶者・パートナーや恋人のいる方、または過去に配偶者・パートナーや恋人のいた方全員におたずねします。

あなたはこれまでに、あなたの配偶者・パートナーや恋人関係にあった人から次の(１)から(３)のような行為を受けたことがありますか。それぞれについてあてはまる番号を<u>１つだけ</u>選んで数字に○をつけてください。



配偶者・パートナーや恋人がいる（いた）人に、配偶者・パートナーからの暴力（ＤＶ）を受けた経験について尋ねている。

(1)「身体的暴力」について、「何度もあった」と回答している女性は3.8%、「数回あった」と回答している女性は18.2%となっており、約5人に1人の女性が身体的暴力を受けた経験がある。これに対して、「何度もあった」と回答している男性は0.6%、「数回あった」と回答している男性は

10.4%となっている。

(2)「精神的暴力」について、「何度もあった」と回答している女性は2.5%、「数回あった」と回答している女性は7.8%となっており、10.3%の女性が精神的暴力を受けた経験がある。これに対して、3.2%の男性が精神的暴力を受けた経験があると回答している。

(3)「性的暴力」について、「何度もあった」と回答している女性は4.2%、「数回あった」と回答している女性は11.8%となっており、16%の女性が性的暴力を受けた経験がある。これに対して、2.8%の男性が性的暴力を受けた経験があると回答している。

［国との比較］

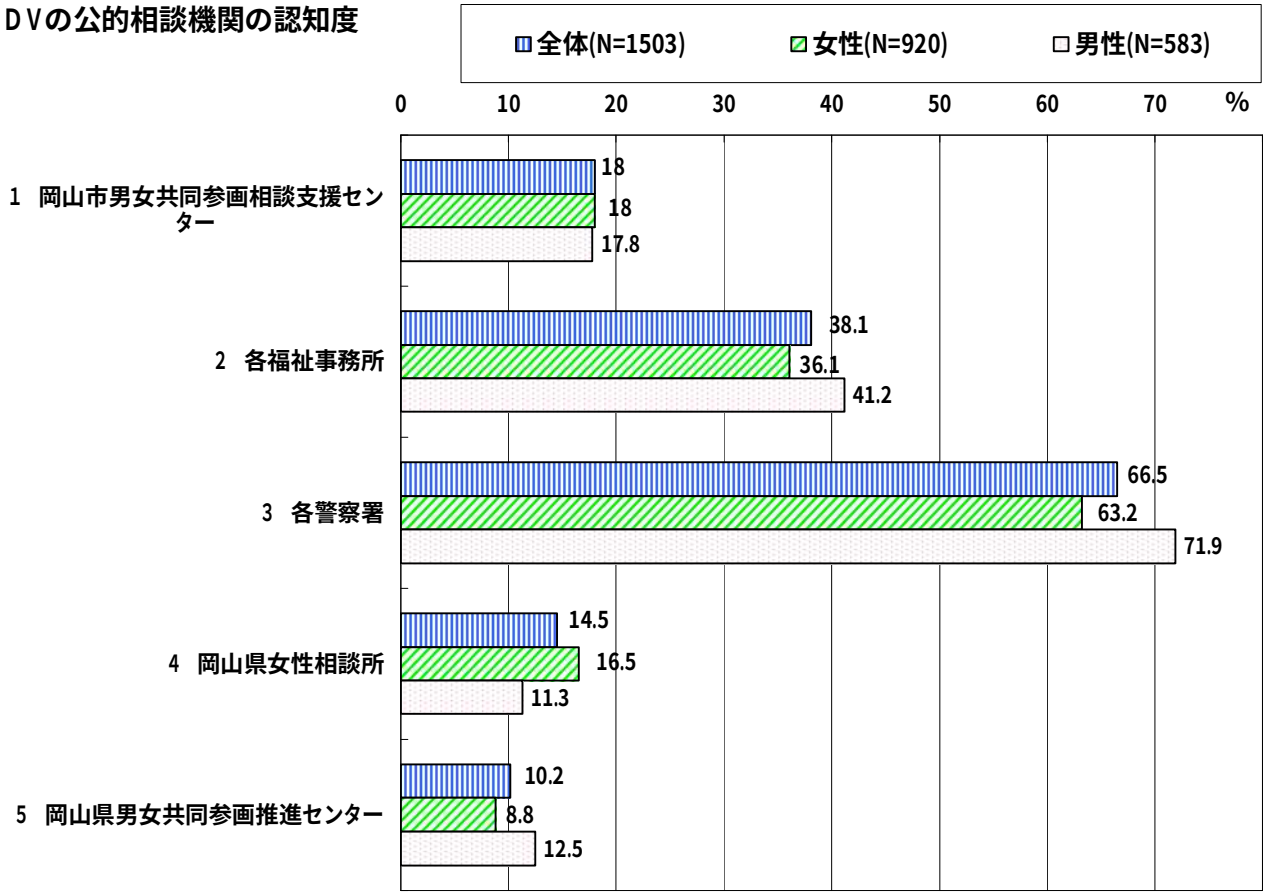
		何度もあった	数回あった	まったくない	答えたくない
身体的暴力	岡山市・女性(N=837)	3.8	18.2	76.6	1.4
	国・女性(N=1714)	4.8	10.7		1.6
	岡山市・男性(N=500)	0.6	10.4	87.4	1.6
	国・男性(N=1409)	1.0	7.1		
精神的暴力	岡山市・女性(N=824)	2.5	7.8	88.3	1.3
	国・女性(N=1714)	1.5	4.1		
	岡山市・男性(N=494)	0.2	3.0	95.1	1.6
	国・男性(N=1409)	0.2	1.6		
性的暴力	岡山市・女性(N=824)	4.2	11.8	78.9	5.1
	国・女性(N=1714)	3.4	5.6		
	岡山市・男性(N=494)	0.6	2.2	93.9	3.2
	国・男性(N=1409)	0.4	0.9		

(%)

平成14年度に内閣府が実施した「配偶者等からの暴力に関する調査」と比較すると、身体的暴力、精神的暴力、性的暴力のいずれにおいても、今回調査で被害経験があると回答した人の割合の方が高くなっている。

問１２　配偶者からの暴力（ＤＶ）についての公的相談機関として、市内には主に次のようなものがありますが、あなたはＤＶの相談機関として、どれを知っていますか。次のうち、知っているものをすべて選んで数字に○をつけてください。(○はいくつでも)

岡山市内にあるＤＶの公的相談機関の認知度について尋ねている。

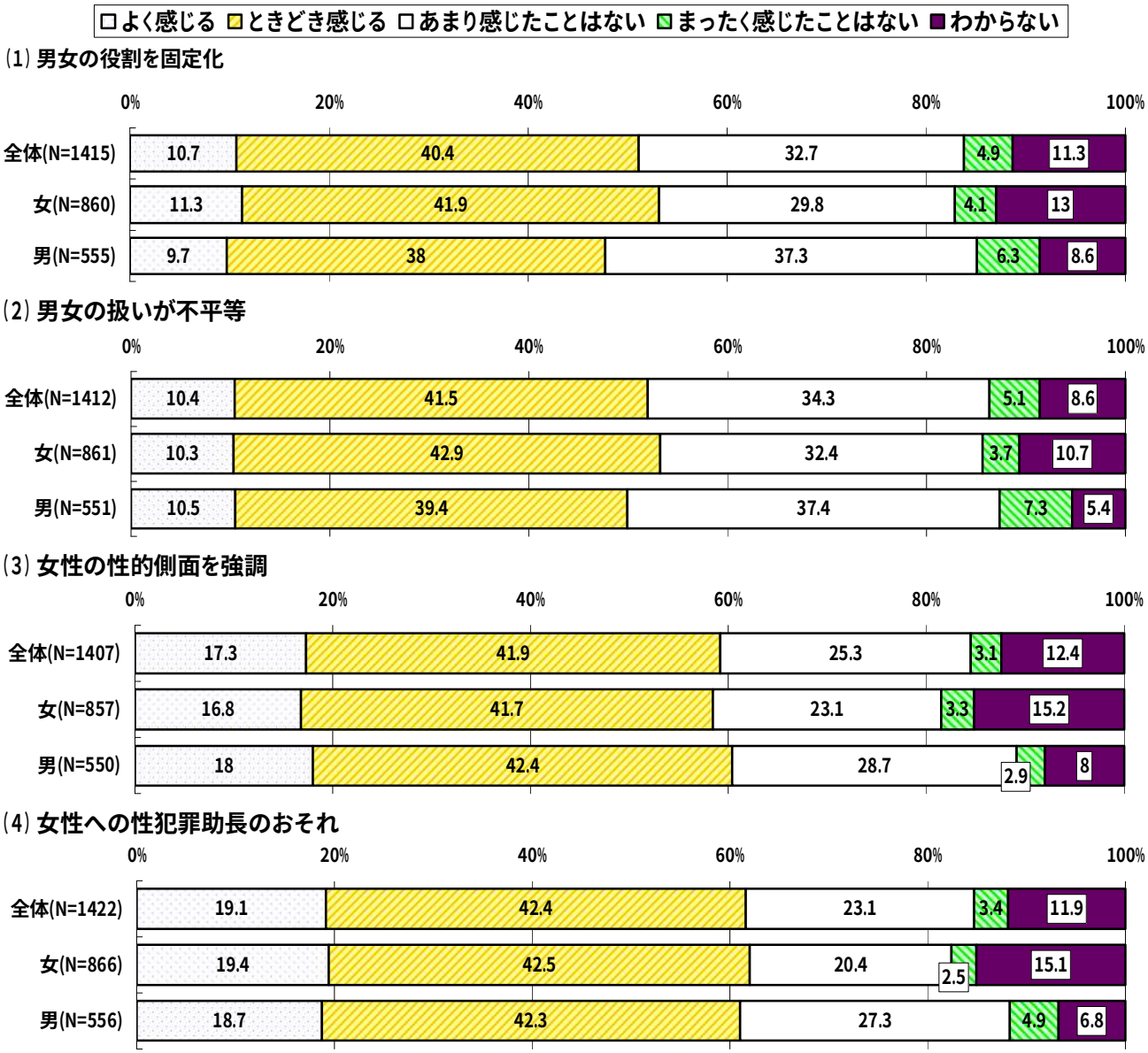


認知度が高いのは、各警察署(66.5%)、各福祉事務所(38.1%)となっており、性別、年代別の認知度に特に違いがあるわけではない。ＤＶの専門的な相談機関については、いずれも相対的に認知度が低い状況にあり、一番高い市男女共同参画相談支援センターでも18%にとどまっている。

７．メディアを見る視点について

問１３　新聞、テレビ、インターネット上の広告や番組等を見て、あなたは次の(１)から(４) のように感じたことがありますか。それぞれについてあてはまる番号を１つだけ選んで数字に○をつけてください。

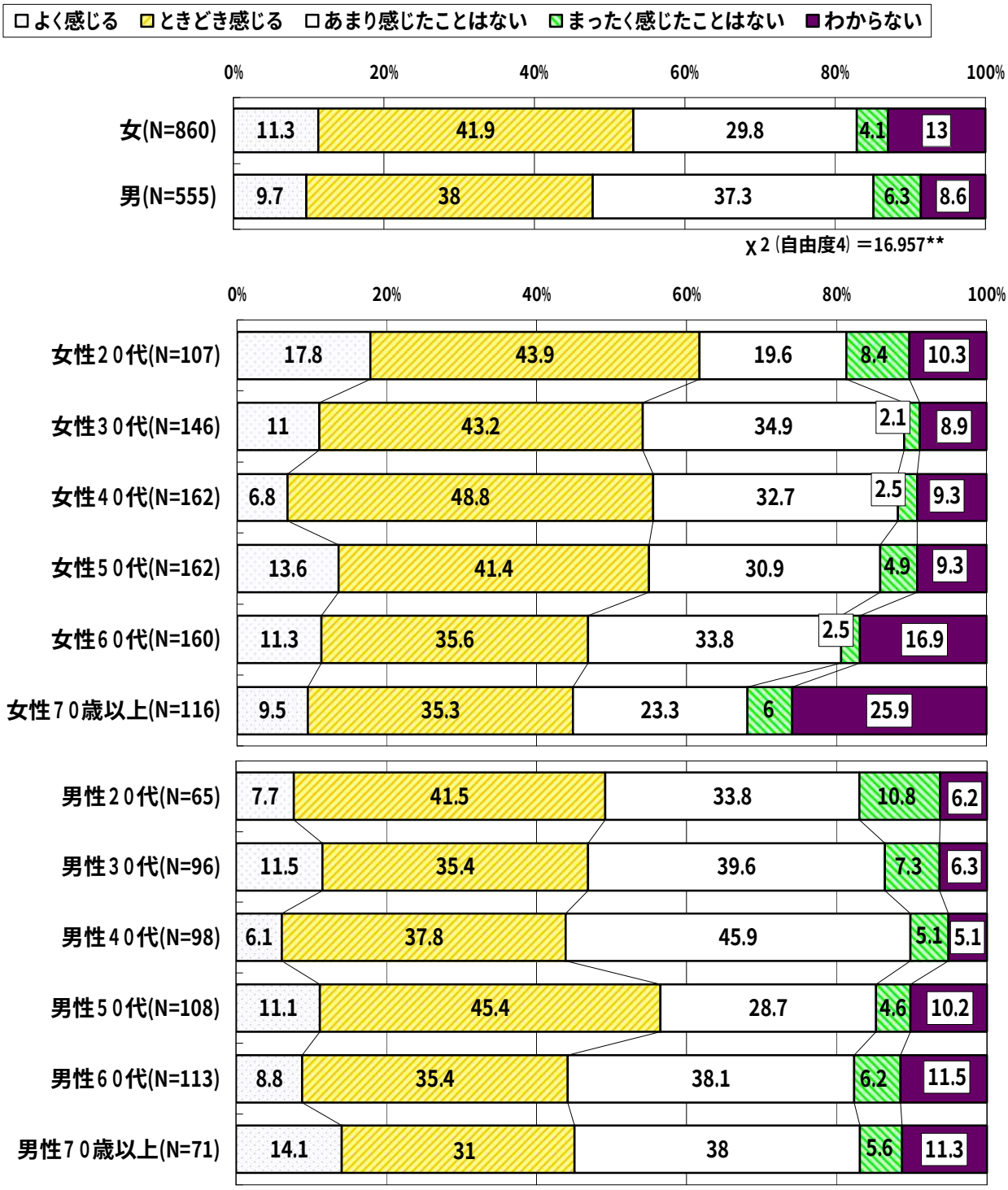
【全体･性別】



新聞、テレビ、インターネットなどのメディアにおいて性差別的表現を感じたことがあるかどうかを尋ねている。「よく感じる」「ときどき感じる」を『感知派』、「あまり感じたことはない」「まったく感じたことはない」を『不感知派』と定義すると、すべての項目で『感知派』が5割を超えている。

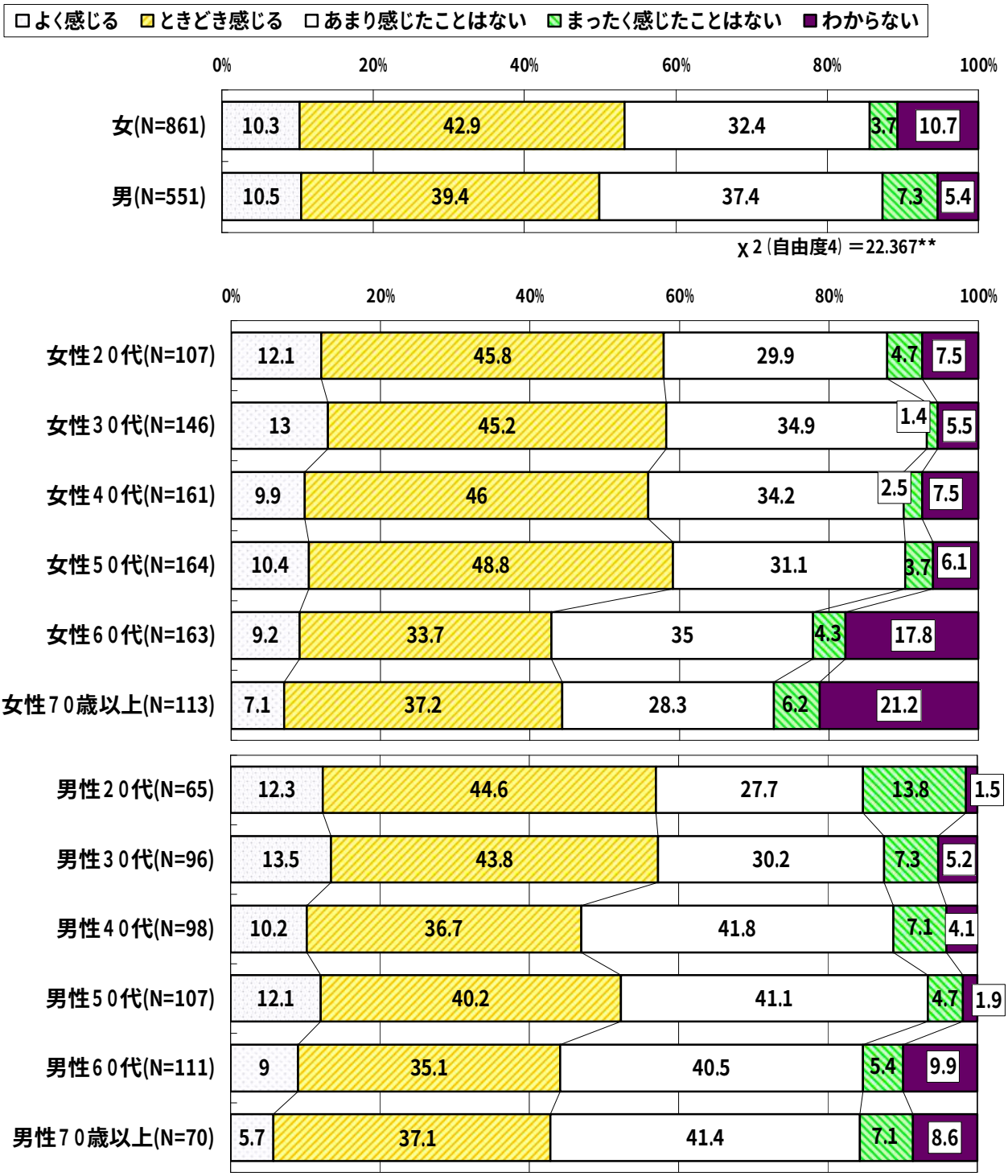
これは、男女ともにメディア表現の中の性差別にある程度敏感になっている状況を示していると考えられる。ただし、すべての項目について、60歳代以上の女性は「わからない」と回答した人の割合が高い。

(1) 女性や男性の役割を固定的にとらえている



性別・年代別でみると、20歳代女性と50歳代男性の『感知派』の割合が高いのは注目される。なお、20歳代女性は「まったく感じない」と回答した人の割合も高くなっている。

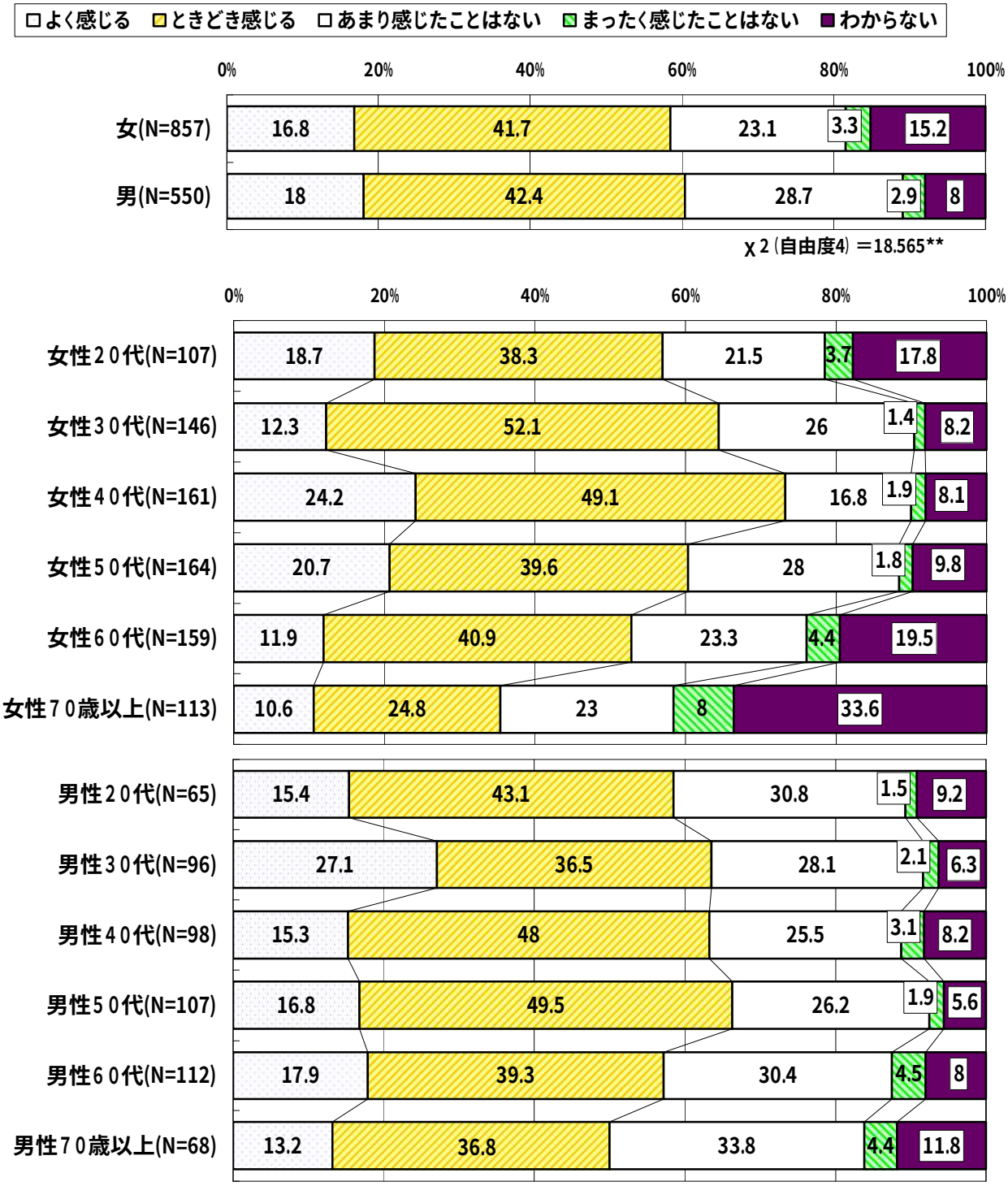
(2) 男性と女性を対等に扱っていない



性別・年代別でみると、40歳代の男性を除き、男女とも50歳代以下で『感知派』が5割を超えている。

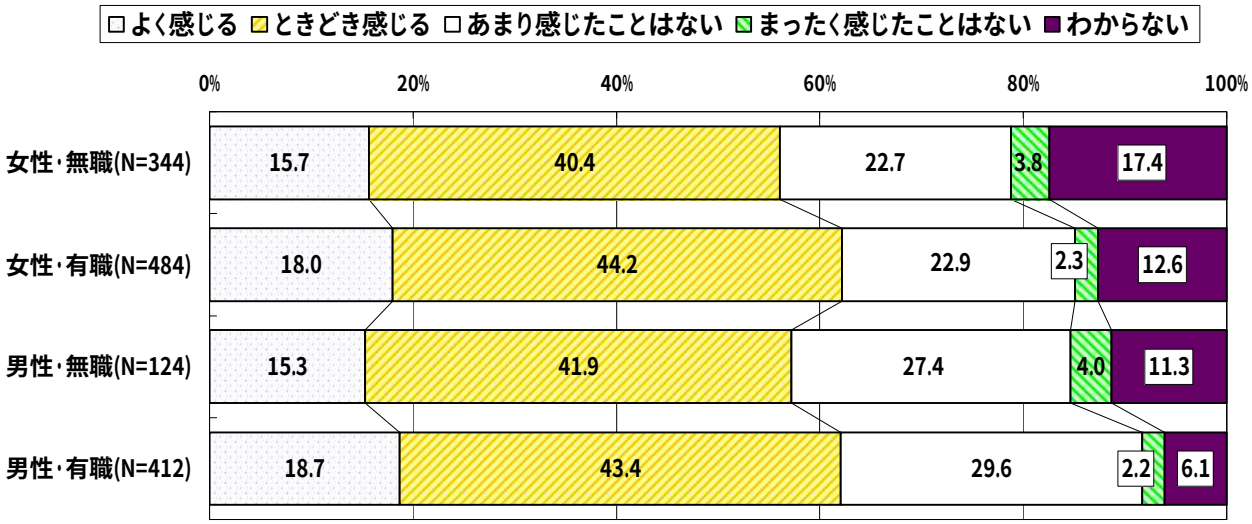
女性は『不感知派』の割合は年代別に大きな違いは認められないが、60歳代以上において『感知派』の割合が低くなっている。

(3) 女性の性的側面を強調している



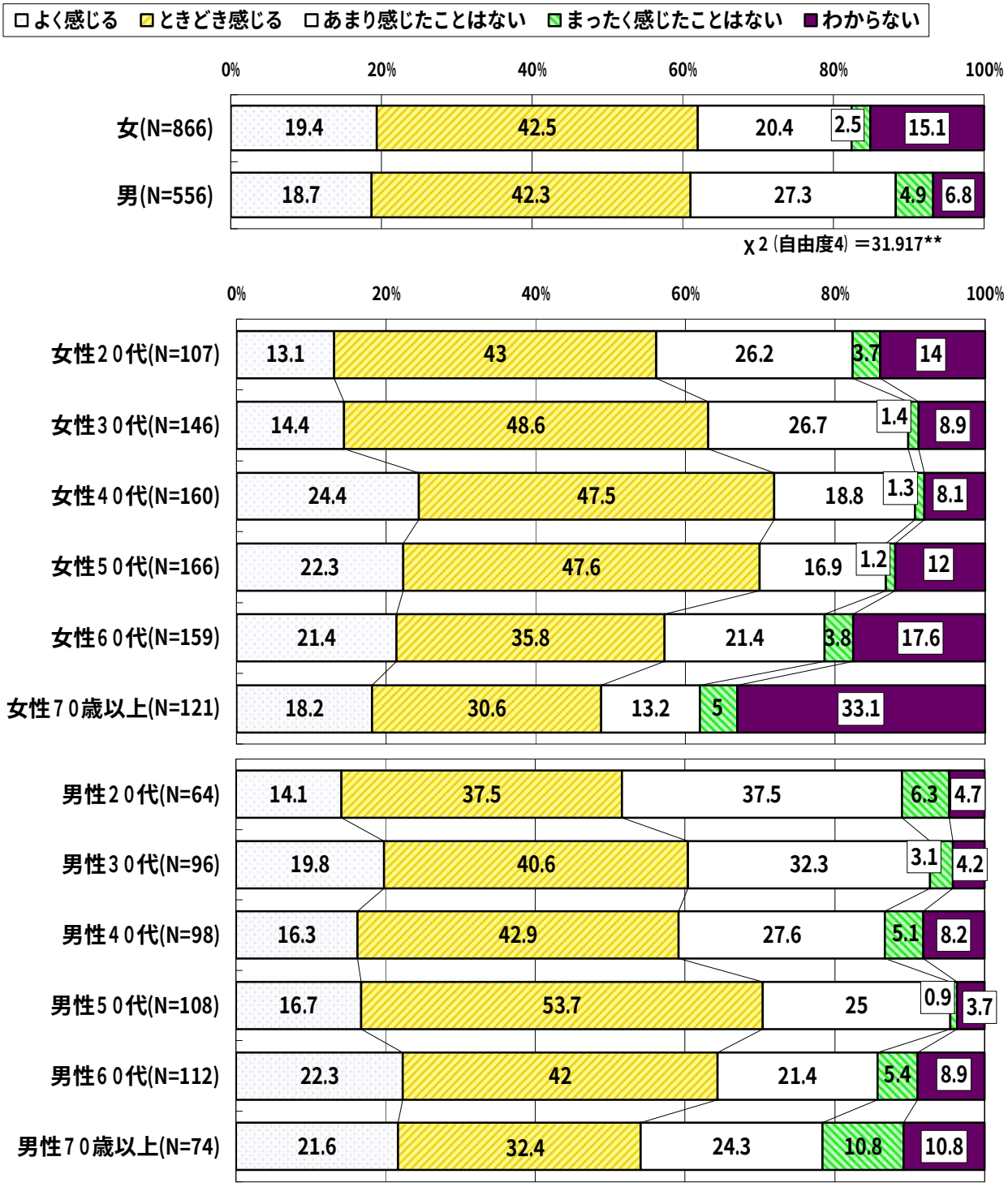
この設問において、唯一、女性より男性の方が『感知派』の割合が高い項目ではあるが、30歳代・40歳代では、女性の『感知派』の割合が高くなっている。
また、女性の方が年代による意識の違いが顕著である。

【有職・無職別】



また、有職・無職でみると、男女ともに有職者の『感知派』が無職の『感知派』を上回っている。(女性有職62.2%＞女性無職56.1%、男性有職62.1%＞男性無職57.2%)

(4) 女性に対する性犯罪を助長するおそれがある



『不感知派』の割合が、男女で差のみられる項目である。20歳代・40歳代・70歳代以上において男女の意識の違いが顕著である。